
魔法少女リリカルなのは 常識を変える者・創造する者

松上

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 常識を変える者・創造する者

【Zコード】

Z0974U

【作者名】

松上

【あらすじ】

神のミスにより死んでしまった主人公達。

神の力により『魔法少女リリカルなのは』の世界に転生する。

人の笑顔の為に戦う主人公達に待っている未来は希望か？絶望か？

その答えは誰にも分からない。

だが、世界は彼等と言うイレギュラーを消そうとしている。

転生者対世界……

転生者の願いが勝つか、世界の運命が勝つかは分からない。

分かっているのは、主人公達は人の為に戦う事だけ……

プロローグ1（前書き）

どうも、松上ですーーー！

不定期更新ですが、頑張りますので応援よろしくお願いしますーーー！

プロローグ1

“平行世界”と言つ言葉を……貴方は知つてますか？

平行世界とは“もしもの世界”や“～だつたらの世界”と言われる、私達と異なつた世界です。

勿論、世界が違うのですからまた違つた人物が存在します。

しかも其の世界に、必ず其の世界の話が存在します。

海賊の話、忍者の話、死神の話、妖怪の話etc. . . . 挙げれば限りが在りません。

しかし、“魔法が存在する世界”がもし存在したら……貴方はどうしますか？

この話の主人公達は、神のミスにより死んでしまい、魔法が存在する世界に転生します。

主人公達は私利私欲の為に戦わず、他人の為に戦います。主人公達は、其の世界の運命を変えます。

全ては、那人達の笑顔を見る為に……

そんな主人公達の話です。

其れでは、どうぞ……

プロローグ1（後書き）

次回は主人公達が登場します

お楽しみに！！！

プロローグ2（前書き）

連続投稿！！

チート能力を貰つ話です

プロローグ2

s i d e?

……先ずは自己紹介をさせてくれ。

俺の名前は佐藤劉。

何故急に自己紹介をしたのかと言つと……簡単に言つたら俺が死んだからだ。

俺は普通の高校一年生だった（・・・）。

何時も通り学校に行って、何時も通り授業を受けて、何時も通り昼飯を食つて、何時も通り部活をしていた。

だが、此処からが何時も通りじやなかつたんだ。

俺は部活が終わつて家に帰つてたんだ。

そして、歩道を渡つていた。

其の時に、トラックが物凄いスピードで俺に突つ込んで来たんだ。

俺は避ける事も出来ずに死んでしまった。

そして俺は今、白い空間をずっと漂つているんだ。

「はあ……不幸だ。」

俺は『』とあるシリーズの主人公の上条 当麻の言葉を口づさんだ。

「お……い……おー……い……」

俺が落ち込んでいたら、何処からか声が聞こえてきた。

「お……い……おー……い……」

そして次第に声が大きくなってきた。

「おーーーい！」

そして遂に、声の主が俺の田の前に現れた。

「はあ……はあ……良かつた、誰かが居たよ……」

声の主は世程急いだのだろう、肩で息をしながら俺の顔を見てやう言つた。

「お前は誰だ？」

「はあ……はあ……俺の名前か？ 俺の名前は津田遊星。つだ ゆうせい 高校一年をやつていたんだ。」

金髪のイケメンの男・津田 遊星は笑つて俺に血口紹介をしてきた。

……ハーフか染めてるな、コイツ。
俺も人の事は言えないがな……

「俺は佐藤 劇。俺もさつき迄高校一年をやつしてた。」

「やつてた？ まさかお前も……死んだのか？」

「……嗚呼、わざわざトライックに退かれて死んだ。」

「ま、マジかよ。……俺もトライックに退かれて死んだんだ。」

ま、マジかよ……

一人とも、トライックに退かれて死ぬとか運が無さ過ぎだろ……

「はあー、取り敢えず友達になろうぜ。死後の世界で、友達が居なかつたら辛いからよ。」

遊星は俺に苦笑いしながら、俺にそつ提案してきた。
しかし、遊星の言う通りだな……

「まあ、よろしくな、遊星。」

「よろしくな、劉。」

俺達は握手をしながら、取り敢えず笑顔でそつ言つた。

「あ、あのー、少し良いですか？」

すると突然、俺達の右側から声が聞こえてきた。

俺達は同時に顔を右に向けると、イナズマイレブンに出てくるキャラが其処には立っていた。

「「……アフロデティ？」」

俺と遊星は声を揃えて、イナズマイレブンのキャラの名前・アフロデティの名を言った。

つてか、遊星もイナズマイレブンを知ってんだな……死後の世界で話せる事が在つて良かつたぜ。

「確かに僕の名前はアフロデティですけど……つて、そんな事言つてる場合じゃない……！」

すると俺達の前に居る人物・アフローティがノリツツコミ的なコントをして俺達にそう言った。

マジかよ……

俺は驚きながら遊星の顔を見ると、遊星もアフローティの顔を見て驚いていた。

「僕は神様です！僕の部下のミスで貴方達は死んでしまいました、なので僕が責任を持つて貴方達を転生させます！！！」

……成る程、神様……こをしてるんだな。

俺も小さい時はやつてたなあ……でも、小学校低学年でそんな子供みたいな遊びは止めたけどな。

でも、このアフローティと名乗る少年は神様……こをしている。俺達はこの子の遊びに付き合つてやんねえとな……！

「そりゃ、神様かあ。だつたら、俺はアポロンな。」

「なら、俺はゼウスだぜ！……」

俺がアポロンとアフローティに言つと、遊星もゼウスと同じ事を考えてたらしくアフローティにそう言つた。

しかし遊星、ゼウスつてお前神様の中でも最高神だろ……まあ俺も人の事は言えないけどや……

「バカにしてません！？僕はマジで神様なんですって！！貴方達を転生させに来たんです！！信じてください！！！」

アフローティが真剣な顔をして其処迄言つなり、まあ信じるしか無いだろうな……

「……其れで何処に俺達は転生するんだ?」

俺がアフロディに聞くと、アフロディは何処からか一枚の紙を取り出して何かを確認した。

……出来れば平和な世界で普通に暮らしたいんだが。

「“魔法少女リリカルなのは”の世界に近い世界ですよ。」

……mazide?

「マジかよー!ナンバーズに会えるぜーーー!あーー、憧れのナンバーズ……よっしゃーーー!」

遊星つてナンバーズが好きなんだ。

だったらstriker'sのラストを変えて護つてやりたいよな

……
つてラストを変える=原作ブレイクをするだから……

「アフロディ、なのはの世界に転生して原作ブレイクをしても良いのか?」

「原作ブレイクですか?……構いませんよ、その世界は“魔法少女リリカルなのはの世界に近い世界”ですから……」

俺が質問すると、アフロディは少し考えて俺に笑顔でそう言つてくれた。

原作ブレイクをしても良いなら大丈夫だな。

「其れでは欲しい力を言つて下さい。望んだ力は全て差し上げます。

」

所謂チートをあげますか……

原作ブレイクしても良いなら、原作キャラ達を絶対に救いたい、
否、救つてみせる。

だとすると、やっぱこの力が一番妥当だよな……

劉「俺は“常識を操る程度の能力”が欲しい。この力が在れば、常識を操つて皆を笑顔に出来るからな。それからBLEACHの斬魄刀が全部欲しい。勿論、BLEACHに出てくる技も使える様にしてくれ。其れから、NARUTOに出てくる技をデメリット無しで使わせてくれ。後は……瞬間記憶能力に身体能力MAXで地球の本棚が欲しい。これ位かな。」

「チートだな、劉。……まあ、俺も人の事は言えないがな。俺も瞬間記憶能力に身体能力MAX、地球の本棚が欲しい。其れで、“創造する程度の能力”が欲しい。後……デジモンの技と武器を使えるのと家庭教師ヒットマンREBORNに出てくる技を使える様にしてくれ。」

“創造する程度の能力”って事はFaTeの武器やリボーンの武器も創造出来る訳だな……

「えつ！？た、たつた其れだけですか！？もつと書いてくれば差し上げるんですよ！！」

するとアフロディイガ、俺達が頼んだチート能力が少ないからなが、焦った顔をして俺達にそう言つてきた。

そう言われても、これだけでも十分チートだからなあ……

「俺はこれだけあれば皆を救える。だから、これ以上のチート能力

は要らねえ。」

「俺もだ。俺達が力を貰うのは皆を救いたいからだ。」

俺達が真剣な顔をしてアフロディイにそう言つと、アフロディイが唖然して俺達の顔を見てきた。

「……貴方達は普通の人間と違うんですね。……其れでは、貴方達に力を授けます！！！」

アフロディイは俺達にそう言つと、何か呪文みたいな物を呴き始めた。

そして行き成り、俺の頭に大量の情報が入ってきた。

俺は一瞬、大量の情報を処理しきれずに気絶し掛けたが、何とか踏み留まって気絶を堪えた。

遊星を見ると、遊星も俺と同じ事になつたらしい。

「これで貴方達が望んだ力は授けました。そしてこれから、“魔法少女リリカルなのは”の世界に近い世界に転生させます。転生する時にあたつて何かリクエストは在りますか？」

転生するだけなのにリクエストなんか在る訳……否、在ったよ。

「転生する時は五歳にしてくれ。流石に赤ん坊からやると……な？後、なのは達と同一年で尚且つなのは達が住んでる場所に転生させてくれ。なのは達が五歳の時に転生させてくれ。」

「……そうだな、俺も五歳にしてくれ。後、俺はスカリエットの所に転生させてくれ。勿論、劉と同じ年に転生させてくれよ。」

そうか、遊星はナンバーズの所に行くから此処でお別れか……

星「劉、此処でお別れだけど話が進めばまた会える。其れ迄の間に、俺はスカリエツティに復讐を止めさせる。だから、必ずお前も原作を乗り越えろよ！！」

遊星は笑顔で俺にそう言つて元気付けてくれた。

遊星……

「嗚呼、お互い頑張るうぜ！そして、また何時か必ず会おうな……！」

俺は遊星にそつと手を差し出して、俺と遊星は堅い握手をした。

「……其れでは送ります！！頑張つて下さい……！」

「「嗚呼……」」

「転生プログラム、始動！！」

そして俺達は、“魔法少女リリカルなのは”の世界に近い世界に転生した。

プロローグ2（後書き）

次回はキャラ設定です

お楽しみに！！

～キャラ設定～（前書き）

劉達のキャラ設定

あくまで五歳の時の設定ですので御了承ください

～キャラ設定～

主人公

名前 佐藤 刘さとう りょう

性別 男

年齢 五歳

容姿 BLEACHに出てくる日番谷 冬獅郎を幼くした姿

性格 優しい・面倒見がいい・心配性

能力 常識操る程度の能力

(劉が望んだ力が世界の常識になる。どんな常識も作れる。)

BLEACHの斬魄刀全て使用可能

(BLEACHに出てくる全ての斬魄刀を召喚し、使うことが出来る。卍解も出来る。)

NARUTOに出てくる全ての技使用可能

(NARUTOに出てくる忍術・幻術・体術をデメリット無しで使える。)

身体能力MAX

(身体のあらゆる力がMAX。筋肉痛などは起きない。)

瞬間記憶能力

(一度見たものは絶対に忘れない。また、光速で現れた物も正確に記憶できる。)

地球の本棚

(地球の全ての情報が分かる。ただし、情報が多くすぎてキーワードを使い欲しい情報を絞り込む。)

備考 本作の主人公。

神の部下のミスによつて死んでしまつた。

しかし、神により『魔法少女リリカルなのは』の世界に転生した。頭は転生前から賢く、全国テストで一位を獲つたこともある。歌唱力もあり、プロからスカウトが来た事もある。本人は気付いていないが、かなりの鈍感。

あだ名がフラグメーカー。

現在ははやての家で居候中。

もう一人の主人公

名前 津田 遊星

性別 男

年齢 五歳

容姿 NARUTOに出てくる波風 ミナトを幼くした姿

性格 明るい・優しい・お調子者

能力 創造する程度の能力

(遊星が望んだ物は全て創造できる。FATEの“約束された勝利の剣”や家庭教師ヒットマン REBORNの“死ぬきのグローブ”、仮面ライダーの変身ツールなども創造できる。また、デメリットが無く遊星の体力が続く限り創造できる。)

デジモンの技使用可能

(デジモン全ての技をデメリット無しで使える。)

家庭教師ヒットマン REBORNの技使用可能

(家庭教師ヒットマン REBORNに出てくる全ての技をデメリット無しで使える。山本の時雨蒼燕流や獄寺のロケットボムなどが使える)

身体能力MAX

(劉と同様。)

瞬間記憶能力

(劉と同様。)

地球の本棚

(劉と同様。)

備考 劉と同じ転生者。

劉と違い、スカリエッティの所に転生したので出番は少ない。しかし、能力は劉に遅れを取らず最強。ナンバーズが大好き。

劉と再開するのを楽しみにしている。
現在、スカリエッティを説得中。

～キャラ設定～（後書き）

次回は劉があの子と接触します

お楽しみにー！

YAGAMI HAYATE (前書き)

題名通りあの子が出ます

只、すいません！！！おれ

言葉が全部漢字です・・・

この小説は泣いてる時以外は漢字です

泣いてる時だけは平仮名です

今頃すいません。おれ

今回も暖かい田で見てください

YAGAMI
HAYATE

劉側

田を開けると青い空が広がっていた。

しかし、背中には地面の温もりを感じない。
僕は一芝原ナニヤ付二四ナ一。

セイジ

海と雲が広がっていました

俺は叫びながら垂直に落ちる。

そのまま落とすと足が折れるので、直ぐに反対を向いたがこのままでは・・・

死ぬ！

劉「どうすれば！！！？そ、そうだ、アフロディイから貰った
“常識を操る程度の能力”を使えば！！！」

しかし、どんどん海が近づいてきた。

劉「ヤケクソだ！！！『俺が望めば何でも出来る常識……』、飛ぶ事を望む——————！」

俺がそう叫ぶと天使の羽根の様な物が背中から出てきた。そして、空を飛んだ。

劉「はあ・・・はあ・・・心臓に悪いわ。はあ・・・はあ・・・遊星も俺みたいに落ちたのか？まあ、あいつには“創造する程度の能力”があるから、何か空を飛べるものでも創造するだろ・・・多分。」

なんか心配になってきたな・・・

劉「取り敢えず地上に降りよう。考えるのはそつからだ。」

俺は羽根を上手に使い、陸地を田指して飛んだ。

劉「やつと陸地が見えてきた・・・長かったなあ。」

あの後、俺は十分間も空を彷徨った。地球の本棚を使おうと思ったが、検索中に海に落ちたら嫌だつたので使わなかつた。

なので、地道に探しよつやく見つけた。

劉「やつと降りますかーー！」

俺は人が来なさそつな場所に行き、そこで降りた。

劉「ふう、なんて「ひ、人が、人が空を飛んどつたーー」・・・見つかつた。」

此処にも人が居たなんて、俺って不用心だな・・・はあ、後ろに居たから分からなかつた。

常識操る程度の能力を使えば、記憶を消す事も簡単だし良いか。そう思つて俺は後ろを向いた。

そこには、車椅子に乗つていて、肩くらいまでしかない茶髪をした女の子・・・

? ? ? 「なあ、どうやつて空を飛んだったんや?」

八神 はやてが居た

諒「（俺つて上条 当麻並に運が無いのか?）はあ・・・

? ? ? 「ど、どうしたんや、溜め息なんか吐いて?」

この子は100%はやてだな。

関西弁だし・・・

しかし、この時期から夜天の書のバグがあつたのか?
記憶が曖昧だから全然覚えてねえ。

・・・後で地球の本棚で検索してみるか・・・

? ? ? 「な、なあ、何か話してえな。頼むわー!」

・・・忘れてた。

取り敢えず自己紹介が無難か・・・

劉「悪い悪い、少し考え方をしちまつて・・・まずは自己紹介をさせてくれ。俺の名前は佐藤 刘。一応五歳をやつてこる・・・多分。」

「??？」多分って君は変わつとるなあ。まあええわ。ウチの名前はハ神 はやへや。平仮名ではやへやねん、変わつとるやろ?」

劉「別に普通にはやてにぴったりの名前だと思ひだ。」

名前を付けられる時の理由は森羅万象、名前にはやへやとした意味がある。

それが変だからと書いて笑う事はダメだ。
まあ、俺は笑わないけどな・・・

はやて「そ、そうか?嬉しいな、名前を書められるなんて~~~~~
//」

はやては顔を赤くしながら言つてきた。

顔が赤い=風邪を引いている可能性、風邪を引いている可能性=とても危険な状況

・・・・これはやばこ!!--

劉「はやて、お前の顔が赤い!!これは風邪を引いている可能性がある!!こんな所で油を売つていてはダメだ!!俺が送つていいってやる!!-せ、案内しろ!!」

俺ははやての車椅子の後ろに回り、全速力で走り始めた

劉「叫ぶ暇があるならお前の家を案内しろーーー。」

はやて「わ、分かつたわ。・・・次は右や。」

右だな！！

劉「了解！！！」

俺は、はやてに案内されはやての家に向かつた。

はやて「い、此処がウチの嫁や。」

此処だな……思つてた以上にデカツ！！！

「はやてつてお嬢様だつたのか？」

ダメだ、原作知識が曖昧だから全然分からん。

はやで、違うで。まあ、取り敢えず家に上がつて行き！」

劉一 分かつた、 そうするわ。

そして、俺ははやてを押しながらはやての家に入った。

余談だが家に入る時、玄関には管理局の・・・誰かの使い魔の・・・猫がいたが魔力の欠けらも無い俺を一度見ると直ぐに寝やがつ

た。

イラッとしたが頑張つて〇〇〇にした。
頑張つた、俺！！！

はやて「ただいまー！」

劉「お帰りー。」

はやて「何で劉君がお帰りつて言つんやつ？」

何でつてはやて、お前なあ

劉「人は『お帰り』つて返事をされると嬉しくなるんだ。俺もな。
だから言つた。それだけだな。」

挨拶をされると嬉しくなるよな？

人は嬉しい気持ちがあるから頑張れる！！！！つて誰かが言つ
ていたような気がする。

はやて「・・・グスッ」

劉「ん？・・・は、はやて、何で泣いてるんだよ！？俺つてお
前を傷つけるような事を言つたか！？」

女の子を泣かせる事は罪だつたような・・・

死んで許してもらつしかないか？

・・・転生して経つた一時間弱で死ぬなんて。

はやて「グスッ、ちやうねん、うれしいねん、おかえりつていって
くれるひとがあるから・・・うち、ずっとひとりやつたから・・・

「

！？思い出した、はやての両親は既にこの世を他界してこるんだった。

はやてはずつと一人だつたんだ。
この家の管理だつて管理局の・・・誰かが管理してゐんだつたな。
だから、この涙は嬉し涙だつたのか・・・

劉「はやて。」

俺ははやてを抱き締めた。

はやて「つゅ・・・くん？」

劉「辛かつたよな？淋しかつたよな？安心しろ、俺がお前の傍に居てやる。お前はもう一人じゃない・・・だから・・・今は泣いとけ。」

俺がそつ言つとはやては泣きだした

はやて「つらかった・・・たびしかつた・・・うわああああああん！」

「――」

劉「ヒシリ、よく頑張つたな。」

俺ははやての背中を擦りながら言った。

はやて「うわああああああああん！――！」

s i d e はやて

はやて「いめんな、服汚してもうて・・・」

ウチは劉君の胸に泣いてしもつた。

すつきりしたんやけど、その代わりに劉君の服をウチの涙で汚して
もうたけど・・・

劉「良じよこれくらい。はやてみたいな美少女の涙で汚れたんだか
ら白濁しないとなー！」

び、美少女つて／＼＼＼＼
真顔でそんな事言われたらウチ・・・／＼＼＼＼
あかん、胸が熱くなつとる・・・
諒君つて今日初めて会つたのに此処まで優しくされたら、ウチ・・・
やけど、劉君の秘密を教えてもらわないとなー！

はやて「なあ劉君？劉君の秘密を教えてくれへんか？」

s i d e out

s i d e 劉

やっぱ教えた方が良いよな、記憶を消すとかしたくないし・・・

劉「そうだな、今から話す事は事実だから信じてくれよ。まず俺は
少し変わった人間なんだ。まあ超能力者みたいな感じだ。力の名は
“常識を操る程度の能力”。俺が作った常識はこの世の常識になる

んだ。はやてが俺と会った時、俺は空を飛んでただろ？あれは『俺が望めば何でも出来る常識』を作ったからだ。此処迄で質問はあるか？」

はやて「はい先生！――」

はやてが手を挙げて聞いてきた。

「うこうのはノリが大切なんだよな・・・

劉「なんだ、はやて君？」

はやて「先生は何処に住んでるんですか？」

それは関係・・・・・あつ・・・・・

諒「・・・・野宿です。」

アフロディティに頼むの忘れてた。

遊星はスカリエットのアジトに住むはずだよな・・・・

羨ましい。」

はやて「な、ならウチの家に住めへんか？ウチの家、開き部屋が沢山有るから。どうや？」

劉「・・・・・」

はやて「あひ、『あんな無理やせー』女神はやて、ありがと『うござこます！――』う、ウチが女神！？」

「のナ優しすぞー！――」

今日から女神はやてとじて禁めなことなーーー。

劉「ありがとな、女神はやてーーー。」

はやて「や、止めてえな。わつかみたいに、ほやてでええかい。」

マジで優しい。

感動して泣きえう。

劉「ありがとな、はやてーーーこれからもよろしくなーーー。」

「やへ「よろしくな、劉君ーーー。」

無事俺は住む場所を手に入れた。

だが俺は、「ナンみたいにタダ飯を食つだけと聞ひ歸候はしない。」

ちゃんと俺ははやての家の家事はするぜーーー。

ダメ人間にはならんぞーーー！

頑張るぜーーー！

YAGAMI HAYATE(後書き)

次回ははやてがある想いに気付きます

次回もお楽しみに！！

気付いた思い（前書き）

在り来たりだ・・・

やつぱ戦闘描写を書くのは難しい・・・

広―――――い心で見てください――――

お願ひします！――

気付いた思い

s i d e 劉

俺は今、砂漠が広がる場所に立っている。

俺の向かい側には、影分身であるもう一人の俺が立っている。

劉「ふう・・・・じゃあ、始めるか。」

影分身「嗚呼、早くしないとはやでが起きるからな。」

そんな会話が終えると俺達は構えた。

ヒュ――

俺達には風の音しか聞こえない。

影分身「・・・・行くぞ――！」

影分身の俺が突っ込んで來た。

影分身「螺旋丸！――！」

影分身の俺は螺旋丸を俺に向けて來た。

俺も直ぐに術を発動させ、影分身の俺に向けて走った。

劉「千鳥！――！」

螺旋丸と千鳥がぶつかり合った。

ドッカ――――――――

大きな爆発音が砂漠に響き、土煙が俺達を覆った。
俺は直ぐに距離を置き、違う術を発動させた。

劉「火遁・鳳仙火の術！――！」

俺は影分身の俺に火遁・鳳仙火の術を放った。
鳳仙火の術は影分身の俺の所に向かつた。
だが、途中で消えてしまった。

劉「白眼！――！」

俺は即座に白眼を発動させた。
白眼で土煙の中を見る。

そこには、影分身の俺のチャクラと水のチャ克拉を持った何かが居た。

影分身「水遁・水龍弾の術！――！」

影分身の俺の声が聞こえると、土煙の中から水の龍が現れた。
俺は直ぐに千鳥を体に覆った。

劉「千鳥流し！――！」

俺は正面に千鳥を集中させ、防御した。

水の龍は千鳥流しによつて呆氣なく消えた。

俺はそれを確認すると直ぐに武器を口寄せした。

龍「口寄せの術！！斬月！！」

俺の能力の一つにBLEACHの武器使用可能がある。なので、俺は口寄せで武器を使用可能に出来るようにした。さらに俺は卍解して天鎖斬月にし、影分身に構えた。

そうすると、俺の周りに黒のオーラの様な物が出てきた。

そして、俺はそのオーラを天鎖斬月に集中させ刀を素早く振った。

劉「月牙天衝！！！」

そうすると、天鎖斬月から黒の斬撃、月牙天衝が出た。

月牙天衝は影分身の俺の所まで向かつていてる。

しかし、月牙天衝は途中で凍つた。

白眼で見てみると、影分身の俺の周りには氷の力が漂つていた。そしてしばらくすると土煙が消え、影分身の俺の姿が見えた。

その姿は、氷の羽根を背中に持ち、氷の尻尾を持ち、右手は完全に氷になつてあり、手の部分が龍の頭になつていて、その手で刀を持つていた。

影分身「卍解・大紅蓮氷輪丸」

影分身の俺はそう言つた。

俺はもう一度天鎖斬月を構えた。

影分身も大紅蓮氷輪丸を構えた。

劉「月牙！！！」

影分身「無限！！」

俺達は必殺技を放とうとした。
だが

pi pi pi pi pi (ry

特訓終了の合図が鳴った。

俺はそれを置き、天鏡軸戸を消した

劉「ありがとな。」

影分身「どういたしまして。」

影分身はそう言って消えた。

影分身が消えた事によつて、俺は影分身の経験値がアーティスされた。

劉「早く帰らないとはやてに怒られる。・・・・俺は望む、八神は

俺は常識を操る程度の能力で、はやての家に転移した。

ヒューリン

劉「到着！！」

俺は自分の部屋に転移した。

外に転移しても良かったのだが、外にはグレアムの使い魔が居るので外に転移が出来ない。

俺は時計を見た。

六時十一分四十七秒

劉「はやてが起きるのは七時だから、風呂に入れるな。」

俺は着替えを持って風呂場に向かった。

劉「ふうー、気持ち良かつた。」

俺は風呂に入り、汗を流した。
そして、時計を見た。

六時三十五分十九秒

劉「そろそろはやてを起こすか。」

俺ははやての部屋に向かった。

side out

sideはやて

時計を見ると時間は六時十一分やつた。

前までやつたらこんな早く起きひんかった。

やけど、劉君がこの家に住み始めてからウチは早く起きるよつこな

つた。

劉君がウチの家に住み始めてまだ一週間しか経つてないけど、毎日が楽しくなつた。

劉君が来る前まではウチは一人やつた。親も早くに死んで、ウチは一人やつた。しかも、足は不自由で好きな所にも遊びに行かれへんかった。

ウチは神様を呪つとつた。

やけど、神様はウチを幸せにしてくれた。

劉君に会わせてくれた。

劉君は初めて会ったウチに優しくしてくれた。

劉君と居ると心が落ち着く。

劉君はウチの傍に居てくれるつて言つてくれた。凄く嬉しかつた。

劉君が居てくれるならウチは何もいらへん。

ウチは劉君のことが・・・

□□□

劉「はやて、起きてるか?」

そう思つとつたら劉君がウチを起こして来てくれた。

はやて「起きてるでー。」

ウチは元気良く返事をした。

劉「分かつた、入るぞー。」

そう言つて劉君は部屋に入つてきた。

劉「おせよ、せせり。」

劉君が笑顔で挨拶してきた。

はやて「おはような、劉君！」

もう言つて劉君に抱きついた。

父が抱き合ふと、劉君は父の事を抱き締めてくれた。

劉「朝から元気なお姫様だ。」

気付いた思い（後書き）

次回は未来のエース・オブ・エースと接触します！！！

お楽しみに！！！

未来のHースと接觸（前書き）

在り来たりだな・・・

誤字・脱字があれば教えてください

未来のHースと接觸

s i d e 劉

俺ははやてを起こした後、朝ご飯を作りにキッチンに向かった。
基本、朝は俺の方が早く起きるので朝ご飯は俺が作っている。

転生する前からも料理は少しあれていたので朝ご飯くらいは作れる。

はやてが時々「一緒に作ろう」と言つので、かなり今はしつかりした料理が作れる。

劉「ふうー、完成だ。」

今日の朝ご飯は、白米に味噌汁、魚にサラダといった和食を中心にしてみた。

はやて「劉くん、着替え終わったでーーー！」

着替え終わったみたいだな・・・

劉「今から行くよーーー！」

俺は、はやての部屋に向かった。
何故向かうかつて？

理由は・・・

はやて「じゃあ頼むわー！」

劉「了解ー！」

俺がはやてをおんぶするためだ。

何故するのかと言つと、俺が提案したからだ。

夜天の書のバグがあるため、はやての足はバグを処理しない限り治らないが、筋肉を硬くしとくトリハビリの時にしんどいので極力車椅子を使わせたくない。

移動以外は基本一人でしているが、移動は俺がおんぶして移動している。

流石に、外出する時は車椅子だが・・・

劉「はやて、顔が赤いが大丈夫か？」

俺ははやての顔を見て聞いた。

はやての顔が何時もより赤かつたので心配だ。

はやて「だ、大丈夫やから／＼／＼／＼／＼

はやては顔を赤くしながら答えた。

余り説得力が無いと思うが、はやてが大丈夫だと言つてているから大丈夫だろう。

俺ははやてをおんぶしながらリビングに向かった。

はやて「美味しい、劉君の料理はどんどん美味くなってるなあ。」

はやてがご飯を食べながら言つてくれた。

劉「そんな事ないさ、はやての教え方が上手だから俺でも美味しく作れるんだから。」

もし、夜天の書が無かつたら料理の先生になつてたかもしれないな。

はやて「ありがとうな。・・・あつ、ナツヤ。今日は病院に行かな
らあかんねん。」

確かにハビリのためだつたよな。

劉「分かつた、俺も付いて行くよ。俺も本を買ひに行く予定だつた
し。」

はやて「ほんまかー? ありがとうなー! ー!

そこまで喜んでくれると俺も嬉しそう。

劉「そ、早く飯を食べて病院に行こう。」

はやて「わづやなー! 」

そして、俺達は談笑しながら朝ご飯を食べた。

劉「はあー、まさかの売り切れかよ。トホホ・・・・

俺ははやてを病院に送つた後、本屋に向かつた。
だが、俺が買おうとした本はまさかの売り切れだつた。
本屋で時間を潰すつもりだったので、持ち物は少しのお金だけだ。
このお金では買い物も出来ない。
なので、俺は海鳴市を適当に歩いている。

劉「ん? 此処は・・・・・

俺はある場所に立ち止まり、中を見た。

そこには、ベンチに座つて泣いている女の子だけが居た。

劉「あの子・・・泣いてる。」の時期に泣いてる子・・・。」またかー！」

俺は急いで公園の中に入り、泣いてる女の子の所に向かつた。

？？？「グスツ・・・グスツ」

劉「なあ、何で泣いてんだ?」

俺は泣いてる女の子に話しかけた。

？？？一え？グスツ・・・あなたはだれ？」

いけね、また名前を名乗るにすこし話しあげた！

劉「俺か？俺の名前は佐藤 刘だ。五歳をやつてる。君は？」

卷之三

俺の記憶が正しければ、この子は……

？？？「グスッ・・・わたしはなのは、たかまちなのは。ございな

6

やつぱり
・
・
・

・これが俺と未来のエース、高町なのはとの初めての出会いだった・・

未来のHースと接觸（後書き）

次回も在り来たりな話です

お楽しみに！！

TAKAMATHI NAZOH A (前書き)

お久しぶりです！！

なんとか更新出来ました！！

相変わらず、「都合主義・無理矢理ですが・・・

誤字・脱字があれば教えてください」！！

今回も広い心を持って読んでください！！

s i d e 劉

やつぱりなのはだったか・・・

なのは「グスッ・・・りゅうくんはわたしになにかよつなの?」

なのはは泣きながら聞いてきた。

劉「嗚呼、何で泣いてんのかなあと思つてよ。」

まあ、少し前に地球の本棚で検索して調べたから知つていたが時期
までは分からなかつたんだよな。

なのは「グスッ・・・わたしさないてないよお。」

泣きながら言われても説得力がないんだけどな。

劉「いいか、なのは。辛い時や悲しい時は誰かを頼りにしろ。俺達
は子供なんだ。子供は、悲しい時や辛い時に誰かを頼りにしないと
いけないんだ。まだ会つてそんなに時間が経つてないが、俺はお前
に頼られたい。だから、お前の泣いてる理由を聞かせてほしい。だ
からなのはは、自分が思つてる事を俺に言つてほしい。俺は全部受
けとめてやる。だから俺を頼つてくれ、なのは。」

なのは「グスッ・・・いいの?なのはめいわくかけるかもしけない
よ。」

五歳児が迷惑を掛けた事を気にするとか、かなり追い込まれていた

んだな・・・

劉「大丈夫だ……せつを言つただろ? 全部受けとめてやるつて……
だから、お前が思つてる事を全部俺に言つちまえ! …」

俺がそつまつとなのはは俺に抱きついてきた。

なのは「グスッ・・・あのは、おとうさんのがしちやつたの。それでね、おかあさんは、おじいことがたいへんなの。おにいちゃんは、すくべおこつてこわいの。おねえちゃんは、いつもおとうさんのおみまいにいつてゐる。だからなのははひとりなの。」

なのはは泣きながら家の事を話してくれた。
俺はなのはの頭を撫でながら話を聞いた。

なのは「グスッ・・・それでね、なのははいつもひとりなの。なのははいいこにならないとだめなの。なのははひとりでもだいじょうぶなようにがんばったの・・・・でも」

なのはは更に泣きだした。

なのは「グスッ・・・なのは、さびしかつたの。でも、おかあさんたちはたいへんだからいつしょにあそべなかつたの。」

劉「分かつた、今までよく頑張つたな。でも大丈夫だ。なのはは一人じゃない。俺がついてる。なのはが寂しいと思つたら一緒に居てやる。なのはが辛いつて思つたら俺が代わりにやってやる。だから・・・今は泣いとけ。」

なのは「う、うわあああああああああん! ! ! ! ! さびしかつた

「...アーティストが見たアート...」

俺がそう言つとなのはは大声を出して泣きはじめた。

「あああああああああああああん……」

「劉君。」
「なのは、・・・ありがとうね、

なのはは泣き止み、笑つて俺にお礼を言つてきた。

劉「なのはの笑顔は可愛いな。」

なのはは顔を赤くして驚いた。

エリノが羨ましい。

なのはは顔を赤くしてお礼を言つてきた。

劉「やっぱ可愛いぞ。将来は美人になるな！」

Strikersのなのはは美人だつたからなあ。ユーノとは結婚しなかつたけどな・・・

なのは「／／／／／／／／」

h
?

なのは「/ / / / / / / /」

なのはが動かないそ
・
・
・

「おーい、なのはー？」

俺はなのはの名前を呼んだ。
だが、反応はなかつた。

なのは

二二

劉一危ねえ！！！

なのはか倒れそうになつたので抱き締めた。

なのは - ボンツ !!! // // // // // // //

の頭から煙が出た。

ゆべ既たらなの世を絶してゐる。・・・

劉「何で氣絶したかは分からんが、なのはをこのままにしどのはマズイし・・・俺が連れて行くか。・・・あつ、はやての迎えにも

行かないとな。・・・・先にはやてを迎えに行くか。「

俺は、なのはをおぶつてはやての居る病院に向かつた。

side out

sideはやて

はやて「遅いなあ、劉君。」

今日は何時ものリハビリが早く終わった。

・・・早く会いたいなあ。

! ?

はやて「な、何や!? 嫌な予感がする・・・劉君か?」

劉君の事を好きになつた女の子が出来た様な氣かする・・・
劉君は誰にも渡さへん！！

劉君は才子その上に、絶妙の口才で、でも誰が劉君の事が好きなんやね？

迎えに来たら話してもいいつで、劉君！――

side out

side 劉

ブルッ！！

劉「何だろう、今凄くヤバいフラグが建つたよ」

まさかはやでか？

よく考えろ、俺。

はやてはそんな子じゃないだろーー！

はやてを信じろーー！

なのは「うーん、むにゅむにゅ・・・・・・りゅうくん

劉「何だなの・・・寝言か・・・必ずお前を一人にしない。だから、安心してくれ。・・・なのは。」

俺はそう言って、はやてが居る病院に向かった。
嫌な予感を心配しながら・・・

TAKAMATHI NAZOH A (後書き)

次回はこの小説初のオリジナル展開？です

お楽しみに！！

意志達の話し合いで（前書き）

これからもつともつとオリジナルの話を考えてこります

もし、変な所があれば教えてください

誤字・脱字などもあれば教えてください

意志達の話し合い

転生者達が、我らの世界に来たようだ……

嗚呼

しかも奴らは、原作を変えている

忌々しい転生者達目が……！

ですが転生者達のお陰で今現在、助けられた人達もいるのですよ

確かにな……

騙されるな……！

奴らは私利私欲の為に、人を助けた……！

そうだ、人間は何時でも、どんな時でも私利私欲の為にしか動かない！！！

奴らには死を与えなければならない！！！

このまま奴らの好きな様にさせていたら、必ずイレギュラーが発生する！！！

確かにそうだが、どうやって奴らを殺すのだ？

奴らは神・アフロディティから貰った力がある

ちょっと待つてください！！

何故転生者達を殺そうとしているのですか！？

彼らは、神・アフロディティのミスによつて死んでしまったのですよーーー

なのに彼らは、私利私欲の為ではなく他人を助ける為に力を得た
そんな彼らをどうして殺そうとするのです！？

お前、転生者達の味方になるのか！？

考え直せ！！

転生者達は必ず本性を見せる！！

奴らの味方になつたつて、お前の立場を悪くするだけだ！！

結構です！！

私は彼らの味方になります！！

私は彼らの下に向かいます！！

や、止めるんだ！！

そんな事したら、お前は一度と帰つてこられなくなるぞ！！

構いません！！

私には、“殺す”という選択肢はありません！！

私は彼らを信じます！！

さよなら！！

ま、待つんだ！！

転移！！！

待て――――――――

畜生――！

絶対に転生者達を殺してやる――！

おい、俺と一緒に転生者を殺すつていう奴は居るか――？

俺はやるよ

俺もだ

オイラモ――！

そつか

・・・・爺さん、お前はどうあるんだ？

まあ聞かなくとも答えは決まってるか
爺さんも俺達と来るだろ？

否、ワシは転生者達を信じてみよつと思つ
じゃから、お主達には協力できん

な
！
？

セジマ・ハナ

! ?

モルヒーネー！

行くぞ、お前等！！！

ପ୍ରକାଶକ

わ、わかつた

りょ、りょうかい

フン
爺さん、俺達に付いてこなかつたことを後悔するんだな
転移！！！

・・・後悔はせぬ
ワシは転生者達を信じてある
じやが

あやつらの実力は相当のものじゃ

転生者の力をを利用して○○○○○○するかもしけんな

・・・ワシも転生者と接触するかの

あの子が向かつた転生者の名前は・・・

佐藤 刘、か

ならワシは、津田 遊星と言つ転生者の所にでも向かつたの
転移！！

意志達の話し合い（後書き）

次回は少しだけオリジナルな話です

お楽しみに！！

なのせをお誂い（繪書き）

やはり小説を書くのは難しきです・・・

今回も広い心を持って読んでください――！

変な所・誤字・脱字があれば教えてください――！

なのはをお誘い

s i d e 劉

はやて「劉君、その子は一体誰なんや？」

はやてが笑顔で聞いてきた。

怖い、笑顔だが目は笑っていない。

嘘なんか吐いたら何されるか分かつたもんじやない・・・

正直に話すか。

最初に言つておく！

はやての笑顔を見て話そうと思ったわけじゃないからな！

俺は最初から話すつもりだったからな！

・・・・俺、一体誰に話してんだる。

劉「実はな、はやて・・・

(説明中)

・・・ってな事があつたんだ。だからなのはを俺がおんぶしてるんだ。分かつてくれたか?」

俺は、今日有つた事を全部話した。

流石になのはをおんぶした状態で話せないので、病院の椅子に座つて話した。

なのはは椅子に寝かせている。

はやては俺の話を聞き終わると頭を抱えて何か考えていた。

何を?

はやて「決めたで!..」

突然はやてが大声を出して言った。

俺は受け付けの看護婦さん達に謝つた。

だから何を?

はやて「今日、なのはちゃんをウチの家に泊りに来てもらお!..そ
うすれば、なのはちゃんは淋しい想いせんでもええしな!..決まり
や!..」

良いのか、勝手に決めちゃつて?

とさづか、まだなのはの母さんに聞いてないから分からぬ。

劉「はやて、まだなのはを家に連れて帰つてないんだぞ。勝手に決
めたらダメだろ?..」

はやて「やつたら許可を貰いに行!..モタモタしてらねへん!..

もつ句を言つても止められないな。
はあ・・・

はやて「劉君……早く早く……」

劉「分かつたよー。」

俺はなのはをおんぶして、はやてと一緒になのはの両親が経営して
いる翠屋へ向かった。

劉「これが翠屋のメニューか」

はやて「なんか美味しそうなメニューぱっかりや・・・」

はやてはメニューを見ながら涎を垂らした。

俺はハンカチではやての涎を拭いた。

劉「涎は垂らすなよ、はやて。」

はやて「あ、ありがとうな／＼／＼／＼／＼」

はやては顔を赤くしながらお礼を言つてきた。

俺達はあの後、翠屋に無事に着いた。

その時になのはが目を覚ました。

そして、顔を赤くしてお礼を言つてきた。

何で顔が赤かったのかは分からんがな。
なのはとはやはては直ぐに仲良くなつた。

その後、翠屋に入つてなのはは母さんの所へ行き、俺とはやはテープルに座つた。

ちゃんとはやても翠屋の椅子に座らせた。

そして毎日飯を此処で食べるため、メニューを選んでいるわけだ。時刻は午後一時過ぎ。

店の客も少ない。

しかし、何を食べようか・・・

「少し良いかしら?」

突然話し掛けられた。

俺はその声の主の所へ視線を移した。

そこには、なのはと一人の女性が立っていた。

俺はその女性が誰だか直ぐに分かつた。

なのはの母親である、高町 桃子さんだ。

劉「俺に何か用ですか?」

桃子「少しお話があるの。一緒に来てくれるかしら?」

O・H・A・N・A・S・H・Iだと!?

俺って何かしたか!?

だ、だが、逃げたらO・H・A・N・A・S・H・I以上の事をされてしまふ・・・

大人しく付いていくか。

劉「分かりました。悪いな、はやて。少し行ってくるわ。」

はやて「分かったわ。」

はやてにかづいて俺はなのと桃子さんについていった。

桃子「まずは自己紹介をさせてね。私はなのはの母親である高町

桃子よ。」

桃子さんが自己紹介してきた。

俺もした方が良さそうだな・・・

劉「俺の名前は佐藤 劉です。なのほと同じ年です。」

俺も自己紹介した。

さて、こつからが本題だ。

マジで何でO・H A・N A・S H Iされなきゃダメなんだ?
・・・・分からん。

桃子「ありがと。」

桃子さんは頭を下げて俺にお礼を言つてきた。
W h y?

劉「何で俺にお礼を言つたですか?俺と桃子さんは今日会つたばっかりですよ。お礼を言われる理由が分かりません。」

俺は桃子さんに言つた。

桃子「貴方はなのはを助けてくれたんでしょう?だからお礼を言つてるのである。」

成る程、理解したぞ。

つまり、桃子さんはなのはを助けてくれたから俺にお礼を言つてゐるのか。

納得納得

劉「俺がしたかつたからしただけです。別にお礼を言われるくらいの事を俺はしてません。」

人を助ける事をするのは当たり前の事だ。
助けたいから助ける、助けるから助ける
これが俺のモットーだ。

桃子「それでもよ。本当にありがとうございます。」

永遠にループしそうだな・・・
素直に受け取つとくか。

劉「どういたしまして。」

俺がそう言つと桃子さんは笑顔になつた。
だが、これは完全な笑顔じゃない。

やはり、なのはの父親の高町 士郎さんの事で頭が一杯なんだろう。

・・・俺が治すか。
俺達と言つイレギュラーがいるから、原作通りに進むかどうかも分
からない。

もしかしたら、士郎さんが死んでしまうかもしない。

俺の力なら士郎さんを救えるはずだ。

・・・そうだ

劉「なのは?」

なのは「どうしたの、劉くん？」

はやてに頼まれてた事を聞くとかないとな。

劉「今日、俺の家に泊りに来ないか？」

なのはをお誘い（後書き）

次回はお泊り会です

お楽しみにーー！

お楽しみなお決まり（おもてなし）

オリジナルの話を聞かねるのは難しこです

でも、頑張ります！

今回も、心を広く持つて読んでください

お楽しみのお泊り会

s.i.d.e 劉

劉「今日、俺の家に泊りに来ないか？」

・

・

・

・

なのは「ふええええええええええええええ！」――？／＼＼＼＼＼＼＼＼

なのはが間を開けて、顔を赤くしながら驚いた。
そんなに驚く事なのか？

・・・・今日会った奴からお泊りの誘いが合つたら驚くか。
納得納得！

桃子「びつじたの、急にそんな事、言つて？」

桃子さんが俺に聞いてきた。

俺はなのはに聞かれたくないので桃子さんに近付き、桃子さんにしか聞こえない位の声で話した。

劉「今日、なのはから全部聞きました。なのはの父さんが入院して
るんでしょ？だから、桃子さんはなのはの事が考えられないくらい
働いていたんでしょ？」

桃子さんは、俺の話を真剣に聞いてくれている。

なのはは、何を話しているのか気になつていてる顔をしていた。

劉「なのはは淋しかつたんです。幾らなのはの気持ちを理解しても、大変なのは変わりが無いでしょ?だから、俺の家に泊まつてもらいたいんです。少しでも、なのはが孤独の辛さを忘れてほしいんです。

」

俺はそう言い終わるとさつとき座っていた場所に戻つて座つた。

桃子さんは、なのはと俺を見ながら悩んでいた。

そして、俺の顔を見て笑つた。

桃子「分かつたわ。なのはの事をお願ひするわね。なのはも、それで良いかしら?」

桃子さんは俺に頼むと、横に座つていたなのはに聞いた。
なのはは顔がまだ赤かつたが首を縦に振つてくれた。
良かつた、はやてが喜ぶぞ!

劉「それじゃあ、俺ははやての所に戻ります。はやてにも伝えない
と。」

俺はそつ言つて立ち上がり、その場から離れた。

はやて「ん?・・・お帰り、劉君ー・じつはつた?なのはちやんは泊
りに来るんか?」

はやては、オムライスを食べながら聞いてきた。
俺ははやての向かい側に座った。

劉「嗚呼、今日なのはが泊りに来るぞ。」

俺は水を飲んでそう言つた。

はやでに凄く嬉しそうな顔をしながらオムライスを食べたりした
やはり、同じ年の女の子の友達が来るのは嬉しいんだろ。

女の子同士じゃないと出来ない話だつてあるしな。

・・・・それより 腹洞アブドン た・・・

「劉くん！劉くんが頼んだお子様ランチだよ！！」

なのはが、顔を赤くしながら俺の頼んだお子様ランチを持ってきてくれた。

でこれを耕んだ

はやて「なのはなちゃん、今日待ってるで、なのはなちゃんが来るのを

11

はやてがなのはに言つた。

・・・オムライスを既に食べ終わっていた。

何処にそれだけの量を入れれる場所があるんだ？

う。
まあ“知らぬが仏”って言う言葉もあるし、
聞かない方が良いだろ

なのは「えつ? はやてちやんも劉くんの嫁にお泊りするの?」

・・・あつ、言つてなかつた。

あの時は、O・H・A・N・A・S・H・Iされないと、安心感でその事を言ひのを忘れてた。

劉「なのは、俺ははやての家に居候してるんだ。だから、俺の家は
はやての家なんだ。」

•

•
•
•
•

なのはが大声を出して驚いた。

反省しないとな。

劉「悪い。一いつのを忘れてた。」

俺は頭を下げて謝った。

悪い事をしたら素直に謝る。

なのは「い、良いよ、別に！ちよ、ちよつと驚いただけだから・・

・頭を上げてよ、ね?」

なのはが俺にそう言つてきた。

本当にこんな優しい子が辛い思いをさせたくない。

・
・
・
頑張るか

劉「ありがとな、なのは。」

俺はなのはにお礼を言つた。

お礼を言う時は笑顔で言った。

そうすると、なのはとはやての顔が赤くなつていった。

これで良かつた、なのはの辛い過去を変えられて・・・
誰も悲しむ必要なんて無い。

俺は、齒に笑つていてほしい。

例え、俺が死ぬようなことになつても・・・

Side —

私は、近くのテー^{ブル}で彼の心を読んでみた。やはり、彼は私が思った通りの人間ですね。

彼なら、これから起ころる様々な戦いや出来事を変えてくれる筈です。

私は、彼をあの人達から護つてみせます。

これが私の、私なりの世界の意志です！！

私は、テーブルに代金を置いてそこから立ち去った。

side 劉

あれから俺とはやては、一度家に帰った。

なのはが泊りに来るので、色々と準備が必要だからだ。
まあ準備と言つてもする事は決まっているんだがな。
はやては、凄くそわそわしていた。

凄く楽しそうな顔をしていた。

その姿が凄く愛くるしかつた。

俺は時計を見た。

午後六時十三分四十一秒

そろそろ来るな。

ピンポン

呼び鈴が鳴った。

はやて「来たで……や、劉君……なのはちやんをお出迎えに行こー。」
「！」

はやてが俺の服を引っ張りながら言つてきた。
はやての目は、凄く輝いている風に見えた。

俺は、はやてをおんぶして玄関に向かった。

「なのせ」「ああ、今日はお世話になりますーーー。」

桃子「劉君、はやてひやさん、なのはの事をお願ひね。」

扉を開けると、なのはは頭を下げ俺達に黙りて桃子さんは俺とはやてになのはの事を頼んできた。

劉「分かりました。」

俺はそういつてなのはを家に入れた。

桃子さんは、何度も俺達に頭を下げて帰つて行つた。
さて、賑やかになるぞ！－

お楽しみのお決つ会（後書き）

次回は、土郎の怪我を治す話になります

次回もお楽しみにーー！

TAKAMATHI SHIROU (前書き)

話が思い付かなかつた・・・

本当にすいません

誤字・脱字があれば教えてください

TAKAMATHI SHIROU

s i d e 劉

お泊り会から三日が経つた。

あれから、俺達はなのはとよく遊ぶ様になつた。

俺とはやてがなのはの家に遊びに行くか、なのはが俺達の家に遊びに来ると言つ事をしている。

なのはの顔から、孤独の辛さや淋しさの気持ちが消えて今はずっと笑っている。

はやても、今まで以上に楽しそうに笑っている。

だが此処最近、誰かに見られている様な気がする。

俺が外に出ると、誰かの視線を感じる。

昨日地球の本棚で検索したのだが、検索できなかつた。

何故だか分からぬが、検索しようとすると地球の本棚から強制的に出される。

なので、誰が俺を見ているのか分からぬ。

まあ何もしてこないのでから、趣味の悪い野郎が俺を付けているのだろう。

危険は無いと思うが、なのはやはてに手を出したら・・・ぶつ潰す！！

さて、この話はこれくらいで良いだろ？

今の時間は深夜一時一十三分四十五秒

俺は今、ある病院に来ている。

こんな時間帯に病院に来たのには理由がある。

高町 士郎さん

士郎さんはこの病院で入院している。

俺は、士郎さんの怪我を治す為に病院に来た。原作通りなら士郎さんは無事に怪我は完治する。

だが、俺と遊星と言つイレギュラーが存在するので原作通りに進む

か分からぬ。

もしかしたら、士郎さんが死んでしまう可能性がある。

そんな事が起これば、なのはの心は完全に壊れてしまう。

俺はそれを防ぐ為に病院へ来た。

劉「・・・此処だな。」

俺は士郎さんの居る病室に着いた。

俺は見回りに来る看護士さん達に姿を見られないよう、常識を操

つて“俺が望めば俺の姿を透明にする常識”を作った。

この力のお陰で、俺は誰にも見つからずに病室に来れた。

俺は病室の扉を音を立てずに開けた。

そこには、ベッドに死んでいるかの様に眠っている男の人・高町士郎さんが居た。

俺は士郎さんに近付き、士郎さんの体の状態を調べた。

劉「・・・怪我は少しずつ治ってきてるが、完治するには後四ヶ月が必要か・・・」

士郎さんは死ないと言つ事実を知り、喜びと悲しみの感情が心から溢れてきた。

喜びは、士郎さんが無事に治る事。

悲しみは、四ヶ月もずっと眠り続ける事。

四ヶ月・・・

劉「俺は望む。“高町 士郎さんの怪我を完治させる事”を望む。」

俺はそう言つて士郎さんの左腕に触れた。

すると、士郎さんの怪我が少しずつ治つていった。

俺自身、魔力が無いので管理局にこの事がバレる事は無い。

俺はそう言つて士郎さんの左腕に触れた。

すると、士郎さんの怪我が少しずつ治つていった。

俺自身、魔力が無いので管理局にこの事がバレる事は無い。

俺の力は、俺の体力を消費して使える。
そして暫くすると、士郎さんの怪我が完治した。

士郎「……う、うう……此処は？」

怪我が完治すると、士郎さんが目を覚ました。
そして士郎さんは、俺を見てきた。

劉「初めまして、高町 士郎さん。」

俺は笑顔で士郎さんに言った。

劉「心配しないでください、俺は貴方の怪我を治しただけですから。

だが士郎さんは、俺を真剣な目で警戒しながら見てきた。

劉「心配しないでください、俺は貴方の怪我を治しただけですから。
が、何故君は私を治したんだ？君と私は今日初めて逢つたんだよ？」

俺がそう言つと士郎さんはお礼を言つてきて、何故怪我を治したの
を聞いてきた
何故つて……

劉「なのはが俺の親友だからですよ。」

俺はそう言つて、今までの出来事・高町家の状況・高町家の人々の状
態を士郎さんに話した。

士郎さんは、黙つて俺の話を聞いてくれた。
俺が全てを話し終わると、士郎さんは目を瞑つた。
多分、話を整理してるのだね。

士郎「私が眠っている間に、そんな事が・・・」

士郎さんの目から、涙が出ていた。

俺は士郎さんに、ハンカチを渡した。

士郎さんは、ハンカチを受け取つて涙を拭いた。

士郎「ありがとう・・・君の名前を教えてくれないか?」

士郎さんが、俺に名前を聞いてきた。

俺が名前を言おうとした時、誰かがこの病室に近付いてきた。

劉「この病室に誰かが来たので、また話に来ます。俺はなのはの親友なので、翠屋で会えます。無事に退院してくださいね!!」

俺はそう言って窓を開けて、下に飛び降りた。

士郎さんが何か言つていた気がするが、早く帰らないとはやてにはれてしまつ。

俺は急いで家に向かつた。

TAKAMATHI SHIROU (後書き)

次回は土郎と劉の話しあいです

次回もお楽しみに！！

土郎と語り合ひ（前書き）

バイトが大変です

一日8時間労働

マジで疲れました

誤字・脱字があれば教えてください

士郎と話しあう

s i d e 劉

俺は今、高町家の道場に士郎さんと向かい合わせに座っている。
何故なら、士郎さんに呼び出されたからだ。

何故呼び出された説明するぜ。

士郎さんの怪我を治したので、士郎さんは次の日に退院した。
士郎さんが退院した日は、なのはが凄く喜んでいたのを憶えてる。
そして士郎さんが退院した日、俺とはやては高町家に遊びに行つた。

そしたら、士郎さんの元気な姿が見れた。

桃子さんは、目に涙を溜めていた。

他にも、俺より年上の男女が居た。

多分、恭也さんと美由希さんだろう。

何故かは分からぬが、恭也さんは俺を真剣な目で見てきた。
何故かを考えてると、士郎さんに呼び出された。

多分、否、確実に俺の力の事だろう。

だから俺は、素直に士郎さんに付いていった。

そして最初に至る。

士郎「まず、君の名前を教えてくれないか？あの時は、結局教えて
もらえなかつたからね。」

士郎さんにそう言わされたので、俺は頷いた。

劉「俺の名前は佐藤 劉。なのはと同じ年です。」

士郎「劉君・・・か。劉君、最初にお礼を言わせてくれ。私の怪我
を治してくれて、なのはを支えてくれて、本当にありがとうございます。」

士郎さんは、俺に頭を下げてお礼を言つてきた。

劉「頭を上げてください。俺が好きで勝手にやつた事ですか？」

俺がそう言つと、士郎さんは頭を上げてくれた。
しかし、士郎さんは納得がいかない顔をしていた。
このまじや、無限ループになつてしまつた……

劉「士郎さん、俺の力について話します。……この事は他言無用
でお願いします。」

俺がそう言つと、士郎さんは真剣な顔になつた。

俺は一度、深呼吸をした。
・・・避けられても、虐待されても良いくらい、話していく途中で
覚悟しないとな。

劉「実は俺は・・・

(説明中)

・・・これが俺の秘密です。」

俺は全てを話した。

俺は一度死んだ存在だと言つ事。

俺は神様のお陰で、力を手に入れた事。

俺は神様の力で、この世界に転生した事。

俺の秘密を全て、士郎さんに話した。

話している途中で避けられても良いように、虐待されても良いように、どんな事をされても良いように覚悟した。

俺は、そうされてもしょうがない人間なのだから・・・

士郎「・・・そう、か・・・劉君。」

士郎さんは、俺に手を近付けてきた。

俺は目を瞑り、殴られても良いように覚悟した。

だが、殴られる痛みは来ず、頭を撫でられる感覚が来た。

俺は目を開けると、士郎さんが俺に頬笑みながら頭を撫でてくれていた。

士郎「私に辛い話をしてくれたね。本当にすまない。そして、全て

を話してくれてありがと。」

劉「し、信じてくれるんですかー?お、俺が嘘を吐いてるのかもしないんですよー?」

こんな話をしても、普通は信じてもられない。
なのに、士郎さんは信じてくれた・・・
何で?

士郎「私は劉君の力のお陰で今此処に居るんだ。それに、君の目は嘘を言つていない。だから信じるんだ。」

士郎さんはそう言つて笑つてくれた。

俺は士郎さんの笑顔を見て、涙が出そうになつた。

だが、俺は涙を堪えて短く「ありがとうございます」と言つた。

士郎「この事を知つているのは、私だけなのかい?」

士郎さんが聞いてきたので、俺は頷いた。

すると士郎さんは、もう片方の手で頭を押さえ何かを考え始めた。
そして少しすると、士郎さんは俺を真剣な顔で見てきた。

士郎「今、秘密を言えとは言わない。・・・だけど何時か、なのはとはやでちゃんと、劉君の事を話してあげてくれないか?一人は優しい子だ。絶対に劉君を貶したりはしない。」

士郎さんは俺にそう言つてきた。

・・・何時迄も秘密にしておくのは嫌だ。
だけど、今の関係を壊したくない。

俺は士郎さんに「何時か必ず話します」と言つた。

士郎さんは「そうか」と言った。

そして、話し合いが終わったのでリビングに戻った。

・・・何時か必ず話す。

俺はそう心に決めた。

s i d e三人称

謎の黒い空間・・・

その場に、数人の男が立っていた。

すると突然、一人の男がその場から消えた。

その場に残された男達は、不気味な笑みを浮かべていた

十郎と話しあい（後書き）

次回はほのぼのした話です

次回もお楽しみに！！

久しぶりの再会（前書き）

夏休みの宿題が終わりません

夏休みの宿題を頑張らないと、マジでヤバくなりそうです

更新はさせたいですが、出来なかつたらすいません

久しぶりの再会

s i d e 劉

劉「行つてくるよ。」

はやて「氣を付けてなあ。」

劉「嗚呼。」

俺ははやてに挨拶をして、家を出た。

家を出て直ぐにグレアムの使い魔に睨まれたが、俺は無視して近くの山に向かつて走りだした。

何故今日、近くの山に向かつているのかと言つと、今日は久々にアイツ（・・・）と会う為である。

今日は家に呼んではやて達に紹介しようと思ったのだが、俺に向けられる視線が最近酷くなってきた。

何処でどうやって俺を見てるのか分からぬのに、アイツ（・・・）を呼ぶ事は出来ない。

なので、無人世界に行つてアイツ（・・・）と会う事にした。

・・・集合時間が近付いてきたな、少し本気で走らないと間に合わないな。

急げう！－

俺は少し本気で走つて、近くの山に向かつた。

劉「フウ・・・、今からなら間に合ひつな。“遊星が居る無人世界に転移する事を望む”。」

俺は力を使って、俺の親友である遊星が居る無人世界に転移した。

s i d e — —

彼・佐藤 劉君は、同じ転生者である津田 遊星君に会いに行つた。
私は、彼をずっと観察していた。

彼は何時も、と言つても少しだけ見ていないが、誰かの為に力を使つていた。

彼は私利私欲の為に力を使うのではなく、誰かを護れる力を獲る為に使つていた。

津田 遊星君も、きっと誰かを護る為に力を使つている筈です。
・・・彼らは、決して存在を否定される人間ではありません。
私が、彼ら（・・）から一人を護らなければ！！

「劉君が無人世界に着いたみたいですね。・・・私も行かなければ。

」

私はそう行つて、足元に魔法陣を出現させた。
そして・・・

「転移！！」

私は劉君の後を追つた。

s i d e 三人称

此處は無人世界。

無人世界とは文字の通り、人が一人も存在しない世界。だが、その世界に一人だけ、しかも一人の少年がその世界に居た。その少年は、地面に座つて目を瞑り、誰かを待っていた。

「・・・・・」

少年はゆっくり田を開けて、立ち上がってズボンに付いた砂を払つた。

すると、少年の前に一つの魔法陣が現れた。
そして、その魔法陣は光り始めた。

「やつと来たな。」

少年は溜め息を一つ吐いて、そう言つた。
そして光りが納まるごとに、一人の少年が立つていった。

「・・・久しぶりだな、遊星。」

その少年は目の前に居る少年・津田 遊星にそう言つた。
遊星は、頭を搔きながらも笑つた。

遊星「遅刻だぜ、劉。まあ、別に気にしてないけどな。」

遊星は目の前に居る少年・佐藤 劉にそう言つた。

劉「気にしてないなら言つなよ。・・・久しぶりだな、遊星。」

劉は、遊星に手を出してそう言つた。

遊星も、劉の手を握つて笑つた。

遊星「久しぶりだな、劉！」

二人の転生者、佐藤
劉と津田

遊星は久しぶりに再開した。

久しぶりの再会（後書き）

次回は戦つまでの話です

次回もお楽しみに！

謎の敵の出現（前書き）

無事に投稿出来ました！

でも、夏休みの宿題はまだ終わってません

本当にヤバいな・・・

今回も広い心を持って読んでください

誤字・脱字があれば教えてください

謎の敵の出現

s i d e 劉

俺は遊星と握手をした後、近くに有つた岩の上に座つて遊星が今までの事を話しあつた後、俺は今までの事を遊星に話した。はやてと接触してはやての家でお世話をなつてゐる事・なほはの心の傷を俺とはやてが支えて癒した事・なほはの父さんである高町士郎さんの怪我を治し俺の秘密を話した事・最近、誰かに観察されてゐる事を全部遊星に詳しく話した。

遊星「なる程な・・・しかし、お前も誰かに観察されてるなんてな・・・」

劉「なー?お前もなのか!-?」

遊星の言つた言葉に、俺は立ち上がり大声を出して驚いた。
俺だけじゃなくて、遊星も誰かに観察されてるなんて・・・
遊星はスカリエットの所に居るから、簡単に見つかる事は普通はない。

だが、遊星は実際に観察されている事を実感している。

俺と遊星
俺達の共通点は

人間

否、これは俺達だけじゃなくて皆の共通点だ。

男

否、これも俺達だけじゃなくて男全員の共通点だ。

転生者

「、これが！？」

劉「転生者である俺達を、誰かが観察してゐて訳か？」

俺がそう聞くと、遊星は頭を縦に振った。

だが、何故俺達が転生者だって事を知ってるんだ？

俺達が転生者だって事を知つてるのは、俺達を転生させてくれたアフロディ・遊星の事は知らないが俺が唯一転生者の事を話した高町士郎さん・俺の事は知らないが遊星が唯一転生者の事を話したジエイル・スカリエッティ。

この三人しか、俺達が転生者だと言つ事は知らない。なのに、一体誰が・どんな方法で・どうやって・何故観察しているんだ？

・・・分かんねえ！！

俺はもう一度布に座つて遊星を見た。

遊星「俺も脳をフルに使つて考えたが、全く分かんねえ。地球>ほしくの本棚で検索しようと思つても、強制的に地球>ほしくの本棚から出される。劉もだろ？」

遊星が聞いてきたので、俺は無言で頷いた。

俺の地球>ほしくの本棚だけじゃなくて、遊星の地球>ほしくの本棚でも俺達を観察してゐる奴等を検索出来ないなんて・・・

遊星「今はまだ接触や攻撃も無いが、油断は禁物だぜ、劉。」

劉「そうだな。・・・もし奴等が、俺達の仲間に手を出したその時は・・・」

遊星「高町流O・H A・N A・S H Iをしてやるや。」

なのは「クシュン！－誰かがなのはの事を噂してゐるのかな？」

遊星がそう言つと翠屋で働いてる子が嘆した様な氣がするが、気にせず俺は遊星の言葉を肯定した。

遊星「・・・・・そうだ、劉、お前にこれを渡しておくよ。」

遊星はそう言つてズボンのポケットから黒い折り畳み式の携帯を俺に渡してきた。

劉「これは？」

遊星「これは、俺とスカリエッティが共同開発をして作った劉専用のデバイスだ。俺達には魔力などは0、全く無い。なのに、デバイス無しで能力を使つていたら管理局の上層部に見つかる。だから、デバイスを作つたのさ。でも、性能は他のデバイスよりもかなり有能だぜ。まあ俺は、劉のと違つて色違の白だけどな。」

遊星はそう言つと白の折り畳み式の携帯を出して俺に見せてきた。

劉「これを使えば、遊星と何時でも・どんな場所でも通話が出来るのか？」

遊星「勿論！俺の能力とスカリエッティの科学の力を使って完成した携帯だぜ。」

遊星は笑いながら言つてきた。

これは便利だな。

これを使えば、何時でも遊星と情報交換が出来る。

俺は黒の折り畳み式の携帯を自分のズボンのポケットに入れた。

劉「ありがとな、遊星。」

俺がお礼を言つと、遊星は笑いながら「どういたしまして！」と言つてくれた。

さて、此処に来て大分時間が経つたな。

そろそろ帰らないと、はやてが心配する。

劉「遊星、そろそろ帰るわ。はやてが心配するしな。」

遊星「おひ、お前に好意を持つてるはやてが待つてるんだからなー！」

・・・遊星、何勘違いしてるんだ？

劉「遊星、はやは俺の大切な家族だ。それに、はやてが俺に持つての好意は家族としての好意だ。その所を間違えないでくれ。」

俺がそう言つと、遊星は手に頭を置いて深い溜め息を吐いた。
何で溜め息を吐いたんだ、しかも深い溜め息を？

遊星「鈍感」

劉「俺は敏感だ。そこも間違えるな。」

俺は遊星の言葉を否定して、遊星に念を押した。
すると遊星はまた、深い溜め息を吐いた。

溜め息と吐くと幸せが逃げるぜ・・・つてはやてが言つてた。

遊星「こりゃ波乱の戦いが思い浮かぶ。」

劉「俺達がそんな事をさせる訳ないだろ?」

遊星「否、俺はこの波乱の戦いはノータッチだ。劉一人で解決させ
る。お前が原因になるんだからな。」

俺が原因の波乱の戦い?

まあ解決させてやるぞ、頑張つて。

劉「じゃあ帰るわ。」

俺は足元に魔法陣を出現させた。

「帰つてもらつちや困る。今からが楽しくなるの。」

!?

俺は魔法陣を消し天鎖斬月を出し、遊星は死ぬ氣のグローブと死ぬ
気丸を創り出して身構えた。

すると俺達の前の光景が歪みだした。

そしてその歪みから、一人の謎の男が現れた。

・・・誰だ、コイツは？

遊星「・・・俺達に一体何の様だ？」

遊星は殺氣を放ちながら目の前の男に聞いた。

初めて会った時より更に強くなつたんだな、遊星。

まあ俺も真面目に修業してゐるがな。

俺も殺氣を目の前の男に放ちながら見た。

「・・・やはり、お前達はこの世界にとつて忌むべき存在。お前達は我ら世界の意志が存在を消し、お前達の所為で変わつたこの世界を修正しなければならない！！」

男は俺達にそう叫んで、一本の白い長剣を出した。

その白い長剣には、アルファベット版デジモン文字が刻まれていた。

劉「オメガブレード・・・」

インペリアルドラモン^{ファイターモード}FM^{パラドライブモード}がオメガモンの力を受け継いで、インペリアルドラモンPMになつた時に使う武器・オメガブレードを男は持つていた。

遊星「気を付ける、劉。オメガブレードの能力は「知つてるよ、怖い程な。」そうか。だが、本当に気を付ける。アイツは只者じやないぜ。」

劉「此処に居る時点で、アイツは只者じやないだろ。」

俺は遊星にそう言つと、遊星は死ぬ氣のグローブをはめ、死ぬ氣丸

を飲み込んで額から死ぬ氣の炎を出した。

しかも、ハイパー死ぬ氣モードだった。

「世界の修正を！！」

劉 「行くぞ、遊星！！」

遊星 「嗚呼！！」

俺達と謎の男の戦いが始まった。

謎の敵の出現（後書き）

次回は初の戦闘

上手く表現が出来たら良いな

次回もお楽しみに！！

究極の呪い……（前書き）

一日遅れてしません

夏休みの宿題をしていたので・・・

頑張つて戦闘描寫を書きました

誤字・脱字があれば教えて下さい

究極の呪い……

s i d e 劉

俺達は今、“聖剣オメガブレード”を持つた男と激しい戦いを繰り広げている。

俺は“天鎖斬月”・遊星は“死ぬ気のグローブ”で、男と戦つている。

だが俺達は近距離ではなく、遠距離から攻撃を放っている。これにはちゃんとした理由が存在する。

奴の戦い方を見ていれば、初心者も同然な戦い方をしている。だが“オメガブレード”的能力が余りにも厄介過ぎるから、俺達は遠距離で攻撃を放っている。

“オメガブレード”的能力は、斬った物を初期化する能力を持っている。

簡単に言つと、オメガブレードで水を斬ると原子に初期化する。つまり、もし俺達の体の一部に少しでも、ほんの少しでもオメガブレードで斬られると、俺達は初期化されこの世から消えてしまう。だから、俺達はそれを防ぐ為に遠距離から攻撃を放っている。

遊星「遠距離から攻撃を放つてもよ、余りダメージを与えれてないよな！！」

隣で攻撃を放つてゐる遊星が、男を睨みながら俺に言つてきた。確かに、男には俺達の攻撃は殆ど喰らっていない。

大半は、オメガブレードで防がれ消えちまう。

しかし、だからと言つて近付いて攻撃するのは自殺行為だ。

だが、このままではコツチの体力が切れて負けてしまう・・・
一か八か・・・“常識を操る程度の能力”を使って、勝負に出るしかねえな

劉「遊星、『常識を操る程度の能力』で『オメガブレードの攻撃を遮断する常識』を創り出し、俺があの男に攻撃する。だからお前は俺が攻撃した後、あの男を攻撃してくれ。」

俺が遊星にそう言つと、遊星は驚いた顔で俺を見てきた

遊星「バカ野郎！お前が幾ら『常識を操る程度の能力』でそんな常識を創つても、オメガブレードで常識も初期化されるかもしないんだぞ！！」

確かに、遊星が言つた事も可能性は〇では無いとは言えない。アイツが持つているオメガブレードは、俺達が知らない能力が在るのかも知れない。

もし、俺が創り出した常識が破られたら、俺は死ぬかもしれない・
・
だけどよ・・・

劉「このまま戦つていたつて、俺達の体力が尽きて負けるだけだ！
！それなら、俺は残された可能性を信じたい！！だから遊星、俺の作戦に協力してくれ！！」

俺が真剣な目で遊星を見ながら言つと、遊星は少し黙り込んで渋々頷いてくれた。

アイツが攻撃してこない今がチャンスだ！！

劉“オメガブレードの攻撃を全て遮断する常識”！

俺は常識を創り出し、天鎖斬月を構えて瞬歩で男に近付いた。
そして俺は男の後ろに回り込み、天鎖斬月で斬り掛かった。

「世界の呪い、発動。」

ザシユツ！－！

ドスツ！－！

俺は男を天鎖斬月で斬り、男は何かを呑いた後オメガブレードで俺を刺した

劉「－？・・・グフツ！－！」

俺は口から血を吐き出した。

「ガハツ！－！」「このガキがア－－！」

男も口から血を吐き出して、俺に今迄以上の殺氣を放ちながら俺を思いつきり蹴つてきた。

その所為で、オメガブレードが俺の体から抜けたが、俺は地面に叩きつけられた。

劉「グフツ！－！」

俺は更に血を吐いた。

視界が霞んできたし、体に力が入らねえし、オメガブレードで刺された場所は物凄く痛いし・・・
は、速く傷を防いで、あの男を倒さねえと・・・

劉「“俺が触れた場所はどんな怪我でも完治する常識”」

ビキニッ！！

俺が常識を創つた瞬間、体に今迄感じた事の無い痛みが俺を襲つた。頭は割れそうな痛み・手足が千切れそうな痛み・体中に剣の様な物で刺されている様な痛み・骨を粉々にされている様な痛み・・・俺は最後に上を見た。

そこには、俺と同じでオメガブレードが刺さっている遊星、
零地点突破・初代エディションで凍結した男の姿があつた。
ファースト

俺はそう思いながら意識を失つた。

side 遊星

な
！
？

遊星「劉ウウウウ！-！-！？」

俺は前で起こつた光景を信じられず、劉の名前を叫んだ。

何故なら、劉は常識を操つて“オメガブレードの攻撃を全て遮断する常識”を創り出したのに、劉はオメガブレードで腹を突き刺され

ていたからだ。

卷之三

劉は常識を操つたじやねえか！？
なのに、何で劉は攻撃を喰らつてんだよ！？
すると男は、劉を思いつきり蹴つて劉を地面に叩きつけた。

ブチイツ！！

俺の中で、何かが切れる音がした。

遊星「絶対に殺してやる！..！」

俺は男に近付いて、零距離X BUSHIERを放とこうとした。その時

劉が人間が出せる筈が無い大声で悲鳴をあげた。

た。 俺は袴紐を男から醫に替へると
醫は墨書きで、なにかしらの刀をしてい

俺は劉の所へ行き、劉の怪我を治せる物を創造しようとした。

ドスツ！・！・！

すると男は、俺の腹にオメガブレードを刺していた。

「究極の呪い、貴様等は終わりだ。」

男が俺と劉を交互に見て何かを呴いていたが、俺には関係ない。俺は死ぬ気のグローブを男の顔の前に構えた。そして

遊星「死ぬ氣零地点突破・初代エディション・・・・」
フースト

ガキイイイインッ！－！－！

男は、俺の“死ぬ氣零地点突破・初代エディション”を喰らい凍結した。

俺はそれを確認すると、オメガブレードを引っ込抜いた。

遊星「ハア・・・・ハア・・・・無謀に・・・突っ込んでしまったな・・・

」

俺がそう小さく呴くと、額の死ぬ気の炎は消え・死ぬ気のグローブも毛糸の手袋に戻った。

そして俺は、そのまま地面に落ちた。

地面に落ちた衝撃の所為で、意識が無くなりそうになつた。

その時、俺の前に一人の老人が突然現れた。

俺に対して何かを言つてゐみたいだが、全く何も聞こえない。

そして俺は、老人を見て意識を失つた。

究極の呪い……（後書き）

次回は新しい味方が登場します

次回もお楽しみに！！

説明と眞実と仲間（前書き）

文化祭の準備、マジで疲れました・・・

荷物運びや必要な物を買いに行つたりして（言わばパシリ）、凄く疲れました・・・

しかも、夏休みの宿題が未だに終わっていない・・・

月曜から学校なのに・・・

誤字・脱字があれば教えてください

説明と眞実と仲間

s i d e 劉

・

・

・

・

・

劉「ウウ・・・」、此處は・・・？」

俺は重い目蓋を開けて、今居る場所を確認した。
此處は・・・何処かの洞窟・・・なのか?
あれ、何で俺が此處に居るんだ?

「あつ、漸く目を覚ました! 大丈夫ですか、佐藤 劉?」

俺が此處に居る理由を思い出そうとしてると、俺の隣に居た一人の女性が俺に話し掛けてきた。
・・・誰だこの女性、女性は俺の事を知ってるみたいだが俺はこの女性を知らないぞ?

劉「あ、貴方は?」

ズキイツ!!

劉「！？ウ、ウウウ、か、体が・・・！」

俺が起き上がるうと体に力を入れた瞬間、体中に激痛が走った。その所為で俺は、力を入れる事が出来ずにまた寝込んだ。な、何で激痛が・・・？」

「ダメですよ、まだ貴方の体は完全に癒えてないんですから。今は大人しく寝てないと。」

女性は俺にそう言つて、毛布を俺に被せてくれた。
ほ、本当に、この女性は誰なんだよ？」

俺は少しずつ治まっていく激痛に耐えながら女性を見ていると、女性は俺の視線に気付いて俺に頬笑んでくれた。

「おっ、漸く目が覚めた様じやな、佐藤 劉よ。」

すると一人の老人が、笑いながら俺に話し掛けてきた。
・・・この老人も俺の事を知っているみたいだが、俺はこの老人の事を知らないぞ。

遊星「劉、目を覚ましたのか！？」

俺が老人の事を考えていると、手や頭に包帯を巻いている遊星が俺の横に来て聞いてきた。

遊星の傷・・・

！？

劉「遊星、あの男はどうなった！？ウ、ウウウ・・・」

俺は素早く体を起こして遊星に聞くと、また俺の体に激痛が走った。
クツ、な、何で体が痛むんだよ・・・・?

遊星「りゅ、劉、お前の傷は俺より酷いんだから、今はしつかりと
休んどけって!」

遊星は俺の背中を擦りながら、俺にそう言つてきた。
お、俺の傷は遊星以上の怪我をしてたのか・・・
俺があの男に受けた傷と言えば、“オメガブレード”で刺された脇
腹位しか無いと思うんだが・・・

「貴方が受けた傷は、オメガブレードで刺された傷だけでは無いん
ですよ。」

すると女性が、俺と遊星を見て悲しい顔をしながらそう言つてきた。
・・・この女性と言い、あの老人と言い、襲ってきた男と言い、一
体何がどうなつてるんだ?

俺はあの後、何とか岩に背中を預けて三人と輪の形を作る様にして
座っている。
理由は、俺が女性と老人に幾つかの質問をするから、輪の形になつ
て座っている。

劉「まず最初の質問だ、貴方達は一体誰なんだ？」

「私の名前はアテネ、四番田の世界の意志です。」

「ワシの名前はオーディン、六番田の世界の意志じや。」

女性と老人・アテネとオーディンは俺に聞かれたので、俺達に自己紹介をしてきた。

アテネにオーディン、神話に出てくる神達の名前かよ・・・しかし、“世界の意志”つて一体何だよ？

劉「一つ目の質問。世界の意志とは一体何だ？」

アテネ「世界の意志とは、その名の通り世界の意志の事です。」

オーディン「この世に存在する生物に意志が在る様に、世界にもちゃんとした意志が存在する。その意志が具現化した物がワシ等じや。」

「

世界の意志の存在＝世界の意志が具現化した存在・・・か。じゃあこの二人は、この“魔法少女リリカルなのは”の世界の意志が具現化した存在、と言つ事になるのか・・・

劉「三つ目の質問。その世界の意志達が、俺達に一体何の用なんだ？」

アテネ「・・・私達は、私達と同じ世界の意志から貴方達を護る為にきました。」

オーデイン「世界の意志はワシ等だけではなく、お前達が今日戦つた男も世界の意志の一人じゃ。ワシ等以外は、お前達転生者を殺して、お前達が行つた原作ブレイクを修正するつもりなんじゃ。」

この一人は俺達を護る為に俺達に接触してきて、残りの世界の意志達は俺達が行つた原作ブレイクを修正する為に俺達を殺そうとしている。

・・・色々と厄介な事が、俺達の知らない事が起つてゐるんだな。

劉「四つ目の質問。俺がお前の仲間と戦つていて“常識操る程度の能力”を使おうとしたら、体中に今迄感じた事の無い痛みを感じたんだ。何でこうなつたか解るか？」

アテネ「それは私の仲間であるアポロンが“究極の呪い”を使って、貴方の“常識操る程度の能力”に呪いを掛けたんだと思います。」

オーデイン「“究極の呪い”を掛けられた能力をそのまま使えば体中に激痛を与える、そして最終的には呪いを掛けられた人間は死ぬんじや。」

「・・・なる程、オメガブレードを刺された時に“究極の呪い”を掛けられたんだな。

そして、掛けられた後に“常識操る程度の能力”を使つたから、体中に激痛が走つたんだな・・・

・・・って事は、遊星も“創造する程度の能力”に“究極の呪い”を掛けられたのか？

遊星「嗚呼、俺もあの戦いの時にオメガブレードで刺されたんだ。だから、俺も“創造する程度の能力”に“究極の呪い”を掛けられたんだ。」

俺がそう考へ込んでいたら、遊星が俺の思つていた事を察したのか
俺を見て言つてくれた。

劉「五つ田の質問。俺達は一度と、“常識を操る程度の能力”や
創造する程度の能力”は使えないのか？」

アテネ「いいえ、私達が“究極の呪い”を少しだけ和らいだので、
二度と使えない訳ではありませんよ。」

オーディン「しかし、ワシ等が世界の意志の力で常にお前達に“究
極の呪い”を和らいでおらんと、お前達は“常識を操る程度の能力
”や“創造する程度の能力”を使えなくなるんじや。ワシ等が“究
極の呪い”を和らいでいても、“常識を操る程度の能力”や“創造
する程度の能力”は100%使える。精々30%～40%じやな、
最高に使えたとしても。」

つまり今は、一人が世界の意志の力を使って“究極の呪い”を和ら
いでくれているから、“常識を操る程度の能力”や“創造する程度
の能力”は、少しだけだが使える訳なんだな・・・
それじゃあ・・・

劉「最後の質問。貴方達一人は俺達の味方なのか、敵なのか、教え
てほしい。」

アテネ「貴方達はこの世界のイレギュラーな存在だとしても、今は
この世界に存在する一人の人間です。私は、貴方達の味方です！！」

オーディン「ワシはまだ完全にお前達の味方ではない、言わば中立
的な立場にある。じやが、お前達と敵対するつもりは無いから安心

するんじゅ。」

アテネは100%俺達の味方で、オーディンは50%俺達の味方なのか・・・

劉「そうか、ありがとうな、質問に答えてくれて。それから、これからもよろしく。」

遊星「これからもよろしくな!」

俺と遊星は、アテネとオーディンを見ながらそつそつと話した。

・・・さて、これ先、俺達は世界の意志と戦つ事になるのか。
長い戦いになりそうだな・・・

説明と真実と仲間（後書き）

次回は、劉がはやてに秘密を話す話（を予定しています）

次回もお楽しみに！

はやてに秘密を……（前書き）

今回の話で、はやてにかなりフラグが建つた様な気がします

しかし、アーテネが空氣だ……

誤字・脱字があれば教えてください

はやてに秘密を……

s i d e 劉

アテネとオーディンの話を聞いて三日が経つた。

この三日で俺と遊星の怪我は大分癒えて、戦う事はまだ出来ないが普通の生活が出来る迄回復した。

なので、俺ははやての家・遊星はスカリエッティのアジトに帰る事にした。

アテネは俺について来てくれて、オーディンは遊星について行つた。

そして俺とアテネは、アテネの力を使って無事に地球に帰つて來れた。

……地球には無事に帰つて来れた、だが……

はやて「劉君、今日迄の三日間……一体何をしどったんや?」しかも、「この女性は一体誰なんや?」

はやてが、正座している俺とアテネを曰は笑つてない笑顔で聞いてきた。

……俺とアテネは、地球に帰つてきて直ぐにはやての家に向かつた。そして、家に着いたのでインター ホンを押して、はやてに鍵を開けてもらつた。

だが家に入った途端、はやてに恐ろしい笑顔で「此処で正座や。」と言わされたので、俺達は直ぐに正座をした訳だ。

はやて「……なんでや……なんでつづけひはなにもおしえてくれへんの?」

劉「は、はやて…？」

俺とアテネが黙つていると、はやてが泣きだしてしまった。
俺は直ぐに立ち上がりて、はやてに近付いた。

はやて「つけは……つけは……つかうへんのことがしんぱいやつた
んや……。なのに、なんでりゅうへんはうちになにもはなして
くれへんの……？」

はやては、自分の服の袖で涙を拭きながら俺に聞いてきた。

……はやて、そんなに俺の事を心配してくれてたのか……

俺は一度はやてから視線をアテネに移し、アテネの顔を真剣に見
た。

するとアテネは、俺の考えている事を分かつてくれたらしく、俺
に頬笑んで頷いてくれた。

……ありがとな、アテネ。

俺は心中でアテネにお礼を言ひて、はやてに視線を戻してはや
ての両肩に手を置いた。

はやて「えつぐ……りゅ、りゅうくん？」

はやてが、涙を流しながらも俺の顔を見てきた。

俺ははやてに頬笑みながら、近くに置いておいたハンカチではや
ての涙を拭いた。

劉「じめんな、はやてに心配を掛けて……。今から、二日間の事を
含めた俺の秘密を話すよ。俺が言つ事は全部真実、だから、黙つて
俺の話を聞いてくれよ。」

俺がはやての涙を拭きながら言つと、はやては無言で俺の言葉に

頷いてくれた。

さて、この三田間の事に関係する俺の秘密を話さないとな

劉「はやて、俺は……」

（説明中）

……これが俺の秘密と、今田の三田間の出来事だ。」「

俺は、俺の秘密と今日迄の三田間の出来事を、はやてに嘘・偽りなく全て話した。

一番最初に、はやてに言つた事は嘘だと言つ事を……

俺は別の世界の人間で、その世界で一度死んだ存在だと言つ事を

……

そして神様であるアフロディティに力を貰い、この世界に転生した転生者だと言つ事を……

そして三日前、この世界の意志である男に殺され掛けたと言つ事を

アテネの存在と此処に居る理由を……

俺は全てはやてに話した。

「たんじやうじき」
たんじやうじき

はやては小さくそう言つて、顔を下に向けて何かを考えだした。
……はやて、俺に対して悩んでくれてるんだろう。

はやて「……あつがとつな、劉君。ウチにそんな辛い事を話してく
れて。」

俺が心の中でさう思つてゐるが、せめては顔を上げて俺にお礼を言つてきた。

何でお礼を言つたんだ?

俺ははやては喉を吐いたしはやてと同じ人間でもない

俺は化け物並
否 化け物の力を持った人間……否 人間じゃな
いのか。

こんな俺に、何でお礼を言つたんだ？

はやて「確かに劉君に嘘を吐かれとつたつて知つた時は、凄くショックやつた。……やけど、劉君が嘘を吐いたのには辛くて人には言

いにいく過去が在ったから吐いたんやろ？そやけど、ウチを信頼してくれたからその事を話してくれたんやろ？そやから、ありがとうやー！」

はやは、俺の右手を自分の両手で優しく包んで俺に囁いてくれた。

だ、だけどよー！

劉「は、はやは俺の事を何とも思わないのか！？」はつきり言つて、俺は人間じゃない！化け物だ！！そんな奴が居て、はやはそんな俺を拒絶したり、避けたり、恐怖したりしないのか！？」

俺は大きな声を出して、心中では怯えながらはやはに聞いた。確かににはやは、近い将来に魔法の存在を知る事になる。

だけど、それ迄は普通の女の子だ！

だから、俺に対して何かしらの感情を抱いているに違いない！

俺が心の中で自己解釈していると、はやはが俺を抱き締めてきた。
……な！？

劉「は、はやは！？」

はやは「劉君は化け物やない。ウチと同じ人間、少し力を持つ人間や。それに、ウチは劉君を拒絶したり、避けたり、恐怖したりせえへん。」

はやは、俺を抱き締めながら俺にゆっくり言った。

劉「な、何でだよ、は、はやは？」

俺は途切れ途切れになりながらも、はやはに聞いた。

あるとほやては、少し俺から離れて優しく頬笑んできた。

はやて「ウチと劉君は家族やろ?・ウチは、家族にそんな態度は取らへん。」

!?

劉「うつ…………あつ…………」

俺は、はやての言葉を聞いた途端、田から涙が出てきた。
するとほやては、俺をもう一度抱き締めてきた。

はやて「あの時と同じやね、ウチが泣いた時は劉君がウチを抱き締めてくれて元氣をくれた。今度は、ウチが劉君に元氣をあげる番や。」

「

はやてはさつ泣いて、俺の頭をゆづくり優しく撫でてくれた。
俺ははやてに撫でられながら、声を殺して泣き続けた。

はやてに秘密を……（後書き）

次回はシンデレラのお嬢様と吸血鬼のお嬢様が出る話（を予定しています）

次回もお楽しみに！

誘拐犯をぶつ倒せ！（前書き）

急いで執筆したので、もしかしたら変な所が在るかもしれません

御了承ください

誤字・脱字・変な所が在れば教えてください

誘拐犯をぶつ倒せ！

side 劉

はやてに真実を話して、何事も無く三日が経つた。

あの後、俺は泣き止んでアテネがはやてに自己紹介をした。

はやて自身、「家族が増えるんやつたらOKやー！」と言つて、ア

テネの同居を許可してくれた。

ホント、はやては良い子だよ。

そしてその後に翠屋に行つたら、なのはが泣きながら俺に抱き付いてきた。

なのはも、俺の事を心配してくれていたららしい。

その後は、久しぶりに三人で太陽が沈む迄遊んだ。

それから三日が経つて俺は今、昨日買つたばかりの漫画をソファーに座つて読んでいる。

はやは晩ご飯の準備をする為にキッチンに居て、アテネはボランティア活動に参加しているので家に居ない。

アテネがボランティア活動に参加している理由は、本人曰く「人の役に立ちたいんです！」らしい。

世界の意志の中で優しいアテネの、アテネらしい理由だ。

三日間の説明はこれ位だな。

俺はソファーに寝転がつて、仰向けになつて漫画を読み始めた。

はやて「あつ！？」

俺が態勢を変えて漫画を読んでいると、はやてが突然大きな声を出した。

俺は漫画を閉じて起き上がり、顔をはやてに向かた。

劉「どうしたんだ、はやて？」

はやて「へ、うん、少し買い物忘れてましたな……。」

はやはては困った顔をしながら、大きい声を出した理由を俺に教えてくれた。

うーん、困っているなら……

劉「だつたら俺が買つてくれよ。俺も賠してたしな。」

俺は立ち上がり、はやはてが居るキッチンに歩きながらはやはてに言った。

はやはて「…………」めんな、劉君。これが買い忘れた物やから。

はやはては俺に謝つて、小せい紙に買い忘れた物をメモして、そのメモとお金渡してきた。

劉「分かつた、直ぐに買つて来るよ。」

はやはて「領を付けてな。」

俺ははやはてからメモとお金を受け取つ、はやはてに見送られて家を出た。

劉「ふう、買った買った。」

俺は、先程スーパーで買った物を見ながらそう言った。

ホント、この街は綺麗だよな。

俺は歩きながら、街を見てそう思った。

ブウウウウウウン……！

俺がそう思つてゐると、後ろから軽くスピード違反のスピードで走つてきた車がやつて來た。

そしてその車は俺の前を歩いていた一人の女の子の横に立ち止まり、中から数人の男が出てきて一人の女の子を無理矢理車の中に乗せて、直ぐに走つて行つた。

……えつ？

お、俺の目の前で、普通にゆ、誘拐？

劉「……何で俺は畜氣にしてるんだよ！――！」

俺は直ぐに正気に戻り、一人の女の子を誘拐した車を走つて追い掛けた。

俺は、遊星から貰つた携帯の機能を使い、買い物袋を携帯に納入させて、誘拐犯達が逃げて来た古い倉庫にやつて來た。

……ホント、この携帯は便利だよな。

俺は物音を立てずに倉庫の扉に近付き、ゆっくりと倉庫の扉を開けた。

すると中には、気持ち悪い笑みをしながら一人の女の子達に近付いている数人の男と、泣きながら怯えている一人の女の子の姿が在った。

劉「ちょっと待つたアアアア！……！」

俺は倉庫の扉を勢い良く開けて、大声を出して男達に言つた。その所為で、中に居た皆が俺を見てきた。

「だ、誰だ、クソガキ！……？」

一人の男が、俺を見ながら大声を出して聞いてきた。
俺の名前……そうだな……

劉「この街に住む少し変わった男だ……」

俺はそう言つて、瞬歩で俺に叫んできた男の後ろに回り込み、手刀で男の首を殴つて男を氣絶させ、二人の女の子の前に立つた。

『な！？』

俺が男を氣絶させた事に漸く気付いた男達は、声を出して俺を見

ながら驚いた。

だが俺はそれに気にする事無く、泣いている一人の女の子に視線を合わせた。

劉「安心してくれ、俺が絶対に助けてやるからよ。」

俺は一人に笑いながらそう言って、立ち上がって真剣な顔をして男達を殺氣を放つた。

劉「何でこんな事をしたのかは知らないが、アンタ等がした事は犯罪だ。今から警察に届けするがうそついてやるよ。」

俺は男達に最後のチャンスを与えたが、男達は刃物や鉄パイプを取り出して、俺に向かつて走ってきた。

劉「……最後のチャンスを無駄にしたな。……後悔するなよ。」

俺は男達にそう言って、体全身に二割程度の雷のチャクラを集中させた。

チツチツチツチツチツ（ry

体全身に集中させられた雷のチャクラは、鳥の鳴き声の様な音を
ずっと鳴らした。

そして男達と俺の距離が僅かになつた時、俺は雷のチャクラを一気に放出させた。

劉「千鳥流し！！！」

『グワアアアアアアアアア

男達は悲鳴を上げて、ゆっくり膝を曲げて倒れた。

俺は“千鳥流し”を止めて、倒れた男達の頸動脈に手を当てて生きているかどうかを確かめた。

ドックン……ドックン……ドックン

全員の心臓は無事に動いていて、俺は安心して二人の女の子に近付いた。

劉「俺が此処でした事は内緒にしてくるよな。」

俺は一人を縛っていた縄を外しながら、二人にそう言つた。

「…………」「…………」「…………」

二人は、俺の顔を涙を流しながら見てきた。

怖い思いをしたから、泣くのも無理ないよな……

俺はポケットからハンカチを取り出し、一人の涙を吹いた。

劉「怖かったのによく頑張ったな。でも、泣きたい時に思いつきり泣かないと辛いだけだぞ。」

俺は一人にそう言つと、一人は俺に抱き付いてきた。

「う、うわあああああああああああん！…………！」

二人は大声を出して俺の胸で泣き始めたので、俺は一人の頭をゆ

つくりと撫で続けた。

誘拐犯をぶつ倒せ！（後書き）

次回は金髪のシンナーお嬢様との話（を予定しています）

次回もお楽しみにーー！

金髪のお嬢様の家へ（前書き）

な、何とか無事に執筆出来た……

テスト後なので凄く疲れました、マジで……

来週の土曜日迄テストが在るので、もしかしたら来週は更新出来ないかもしれません

誤字・脱字が在れば教えてください

金髪のお嬢様の家へ

s i d e 劉

誘拐犯を殺さない程度に加減して倒した日から一日が経つた。
今日、俺は少しお洒落をしてある場所に向かっている。
お洒落と言つても、普段着と余り変わりは無いがな……
そう思つていたら、何時の間にか目的地に着いていた。

劉「……本当に大きいな、此処の家は……」

俺は、目の前に在る大きな屋敷を見上げながらそつ呟いた。
この家は、海鳴市に住んでいるお金持ちの家の一つだ。
はやての家（俺の家）も大きいが、この家はそれ以上に大きい。

劉「さて、何時迄も関心しないで、さっさと家に入れて貰おう。」

俺は独り言を言つて、背伸びをしてインター ホンを押した。
……小さい体つて便利かと思つたけど、変な所で不便になるよな。
まあ気にしないけどさ……

『はい、ドチラ様でしょうか?』

俺がそう思つていたら、インター ホンから男の人の声が聞こえて
きた。

……この家の執事か、メイドさんだろ?。

劉「家に呼ばれた佐藤 劉と言つ者です。」

俺は背伸びをして、インター ホンに聞こえる様にそつ呟つた。

……面倒臭いな、体が小さいと……

まあその内、体が勝手に慣れてくれるだろ。
人間の慣れって、本当に怖いよな……

『佐藤 刘様ですね、お待ちしておりました。』

男の人があの前に在る扉が開いた。

……様付けで呼ばれるのは慣れてないから、凄く変な気分だ。
俺はそう思いながら、扉の中に入つて行つた。

劉「犬……犬……犬……何処を見ても……犬……どうやつて見ても
……犬……此処は犬の飼育園か？」

俺の屋敷に入つての一言が、“犬”と言う言葉が沢山出てきた。
だが、“犬”と言う言葉が沢山出ても俺は悪く無いと思う。
何故なら、この屋敷の至る場所に犬が沢山居るからだ。

「佐藤 刘様ですね？ワザワザ遠い所から来て頂いてありがとうございます。」

すると前から、執事服を着た少し老けている男性がやつて来て、
俺に頭を下げるよう言つてきた。

……この人、犬を器用に避けてやつて来たよな
もう慣れてるんだ、犬の事を……

劉「別に遠い場所からやつて來た訳ではありませんよ。それに、招待されたのは俺なんですか？」

俺は苦笑いしながら、俺に頭を下げている男性にそう言つた。
招待された立場なのに、来ただけで頭を下げるるのは何か変な
気分だ。

俺がそう思つていて、執事服を着た男性は頭を上げてくれた。

「フフフ、お嬢様から聞いた通り、貴方はお優しい御方だ。」

執事服を着た男性は、俺に頬笑みながらそう言つてくれた。
……へエ、アイツ、俺の事をそんな風に見てくれてたんだ。

「申し遅れました、私はお嬢様専属執事の鮫島と言います。」

劉「俺の事は知つてると思ひますが、俺は佐藤 刘と言います。今日はお世話になります。」

鮫島「はい、よろしくお願ひします。それでは、お嬢様が部屋でお待ちしておりますので、直ぐに部屋にござ案内します。」

劉「はい。お願ひします。」

さて、何をさせられるのかね……？

俺はそう思いながら、犬を踏まない様に鮫島さんの後を付いて行つた。

金髪のお嬢様の家へ（後書き）

さて、次回はほのぼのした話（を予定しています）

……何時になつたら原作に入れるんだ？

次回もお楽しみに

ARISA・BANINGUSU（前書き）

今日、祝日に学校に行ってテストを受けてきました。

現代国語は大丈夫ですが、家庭科が凄く心配です……

ヤバい、マジで心配になつてきました……

誤字・脱字が在れば教えてください。

ARISA・BANINGUSU

s i d e 劉

俺は鮫島さんに案内された部屋に入ると、そこにかなり立腹の顔をした金髪の少女が居た。

「劉！アンタ、私を待たせるつてどういつ事…？」

金髪の少女は怒りながら俺にそう言つてきた。

……俺って遅刻したのか？

俺は部屋に在る時計を確認すると、時刻は未だ十時前だった。

劉「何を言つてるんだ？元々、此処には十時に来つてお前が言つたんだぞ、アリサ？」

俺は不機嫌な金髪の少女・アリサを見ながらそう言つた。

コイツの名前はアリサ・バニングス。

何故俺がアリサの家に居るのかと言つと、簡単に言つとあの事件（誘拐事件）でアリサを助けたのでそのお礼的な感じで呼ばれたのだ。

もう一人の方にも呼ばれていで、ソッチには明日お邪魔させて貰う。

まあ説明はこれ位にして、何でアリサは怒つているのかが俺には理解出来ない。

俺は十時に家に来る様アリサに言われたのに、十時前に来たら遅いってどうなのよ？

鮫島「お嬢様は劉様と速く会いたかったのですよ。」

アリサ「さ、鮫島！？／＼／＼／

俺が考えていると、俺の隣に居た鮫島さんがアリサが怒っている理由を教えてくれた。

アリサは顔を赤くして、鮫島を可愛く睨み付けていた。
そして俺と目が合つと、顔を下に向けて目を逸らされた。

劉「それは悪かったなアリサ、待つてくれたのにそんな事に気が付かず時間通りに来ちまつて……」

アリサ「べ、別に良いわよ……。ちや、ちやんと来てくれたし……／＼／＼／

俺が申し訳ない気持ちで謝ると、アリサは顔を上げて俺を許してくれた。

しかしアリサ、お前はそんなに……

劉「そんなに俺と遊びたかったなんてな。」

俺が笑いながらそう言つと、急に部屋の空氣が冷たくなった。

えつ、俺って間違つた事を言つた？

アリサを見ると俺を見て深い溜め息を吐いてるし、鮫島さんを見ると俺を同情などの感情が籠もつた目で見てくるし……

俺は悪い事を言つたのか？

そうじやないと、二人がこんな態度を取る訳無いし……

劉「えつ……と、理由は分からぬけど」めん。「

アリサ「……良いわ、別に。何となく予想はしてたしね……

俺が謝るとアリサは許してくれたが、何を予想してたんだ?
……さつぱり分からん。

鮫島「それではお嬢様、劉様、何か在れば呼んでください。」

劉「あつ、ありがとうございました。」

鮫島さんは俺とアリサに向ひて部屋を出て行こうとしたので
俺は鮫島さんにお礼を言つと、鮫島さんは俺に頬笑んで頭を下げて
部屋から出て行つた。

……スゲホ格好良いんだけど、鮫島さんつて。

士郎さんは違つた格好良さが在るんだよな、鮫島さんは
それに凄く執事が格好良く見えてきた……

今度鮫島さんに、執事の極意でも教えて貰おうかな?

アリサ「それじゃあ劉、今日は一杯遊ぶわよー。」

劉「わ、わうー。」

俺はアリサに少し遅れて返事をして、俺達は遊び始めた。

劉「はやで、俺の姿を見てビビり出す?」

はやて「何や急に呼んだ……り…………て」

劉「今日帰りに、鮫島さんが俺にこの執事服をプレゼントしてくれたんだ。……似合つてるか?」

俺はその場で回転して、はやてに執事服を見せた。
今日の帰り、鮫島さんが余っていた執事服を俺にプレゼントしてくれたんだ。

プレゼントを貰った時は、鮫島さんと堅い握手をしたぜ!。

ただ条件として、アリサの執事を時々やって欲しいって言われた。

俺は迷う事無くOKを出し、執事服を貰った。

アリサが顔を赤くしていたが、俺には顔を赤くする要素が何処に在ったのか分からなかつたがな……

そして家に帰ってきて、執事服に着替えてはやてに感想を求める訳だ。

はやて「(ボーー)／＼／＼

はやては顔を赤くして俺をボーッとしながら見ていた。

劉「え? ……と、はやて?」

はやて「!?!に、似合つてるので、劉君! 激く格好良い!／＼／＼

はやは顔を赤くしながら感想を言つてくれた。
少し、執事の練習でもしておへか……

劉「ありがとうございます、はやてお嬢様。」

はやて「あ、アカン……／＼／＼／

俺は方膝を付いてはやてに頬笑みながらお礼を言つと、はやては顔を赤くして氣絶した。

……

劉「は、はやて……？」

俺はその後、はやてを急いで部屋に運んでベッドに寝かせた。

そしてボランティアから帰ってきたアテネに、一時間は軽く説教された。

はやは時々執事服を着てくれって言つし、アテネは二度と執事服を着るなって言つし……

どうしたら良い訳、俺は？

ARISA・BANINGO（後編）

次回はおじとやかお嬢様の話（を予定しています）

次回もお楽しみにーー！

紫髪のお嬢様の家へ（前書き）

今回から「」の前の名前を省きます。

頑張つてキャラを出していくますが、分からぬ部分が在るかもしれませんので御了承下さい。

誤字・脱字が在れば教えてください。

s.i.d.e 劉

アリサの屋敷に招待され、アテネに説教された日の翌日……

「さて、今日は一体何をするのかね？」

俺は今日も、少しお洒落をしてある場所に向かっている。

白を基調とした半袖のTシャツに黒のジーパンと言つ普通の格好なんだけどな……

まあそんな事を思いつつ歩いていたら、何時の間にか目的地に着いていた。

「……此処の家も我が家やアリサの家に負けない位大きいな……」

俺は、我が家やアリサの家に負けない位の大きさである田の前の屋敷を見上げながらそう呟いた。

今日も俺はある人物に招待されて此処にやつて來た。

……アリサの家に行つた時も思つたが、何かプレゼントを持つてきた方が良かつたかも……

俺は昨日と今のこと少し後悔しながら、背伸びをしてインターホンを押した。

……やっぱ小さい体つて不便だな、今更だけ……

『はい、ドチラ様ですか？』

俺が小さい体に心の中で少し愚痴を思つていたら、インターホンから女人の声が聞こえてきた。

……声が女人の人だつたから、多分この家のメイドさんだろ？。

つと、何時迄も黙つてぢやダメだな。

「今日、家に招待された佐藤 刘と言つ者です。」

俺は背伸びをして、インターホンに聞こえる様に少し大きな声で
そう言つた。

……アリサの家では体が勝手に慣れてくれるつて思つたけど、慣
れる迄に時間が掛かるぞ……

『佐藤 刘様ですね、お待ちしておりました。』

俺がそう思つていると、女人の人（アリサ）が俺にそう言つて俺の前に在る扉
を開けてくれた。

……やっぱ様付けで呼ばれるのは、何か変な気分だ。

まあ、そんな事を思つてもしづがないから、速く家に入ろ
う。

俺はそう思つて屋敷の中に入つて行つた。

「猫 猫 猫 何処を見ても 猫 ビうやつて見ても
猫 アリサの家が犬の飼育園なら、此処は猫の飼育園だな……」

俺は屋敷に入つての一言がアリサ家では“犬”だったが、此処で

は“猫”と言つ言葉が沢山出てきた。

しかし、“猫”と言つ言葉が沢山出てもしじょうがない。

何故なら、この屋敷の至る場所に猫が沢山居るからだ。

……アリサの家とほぼ同じ反応と同じ説明しかしてないな、俺……

「佐藤 刘様ですね？お迎えに行けなくて申し訳ありません。」

すると前から、メイド服を着た薄い紫色の髪をした女性がやつて来て、俺に頭を下げて謝つてきた。

「否々、招待されたのは俺なんですから、謝らないで下さい。」

俺は苦笑いしながら俺に謝つてきたメイドさんと話した。

招待されたのは俺なのに、迎えに来られたら何か悪い気分になる。こう言う所が日本人なのだろうか？

俺がそう思つてみると、薄い紫の髪のメイドさんは頭を上げてくれた。

「……男の子が苦手なお嬢様が唯一話せるのも理解出来ます。」

薄い紫の髪のメイドさんは、俺に頬笑みながらアイツの事を教えてくれた。

……アイツ、男が苦手だったのか……

だけど、俺は男なのに招待されたよな？

……何で？

「申し遅れました、私は忍お嬢様のお世話係りのメイドのノエル・

K・H・アリビカイトと言います。」

俺が考え込んでいると、薄い紫の髪のメイドさん・ノエルさんが

頭を下げて自己紹介してくれた。

「まあ俺の事は知っていると思いますが、俺は佐藤 刘と言います。今日はよろしくお願ひします。」

俺がノエルさんに頭を下げてそう言つと、ノエルさんは「コチラにさよろしくお願ひしますね」と言つてくれた。

「おねーさまーー！」

ノエルさんが俺にそう言つた時、奥からもう一人のメイドさんがコツチ向かつて来た。

「」のメイドさん、何処かノエルさんと似てる様な？

「」の子は私の妹の……」

「ファリン・K・Hーアリヒカイトです！」

するとノエルさんに似ているメイドさん・ファリンさんは俺に頭を下げる自己紹介してくれた。

「俺は佐藤 刘です。今日はよろしくお願ひしますね。」

俺は頭を下げてファリンさんに自己紹介をすると、ファリンさんは元気な声で「よろしくお願ひしますー」と言つてくれた。

「ファリン、劉様をすずかお嬢様の所へ。」

「はー、おねーさまー。」

そしてファリンさんは歩き始めたので、俺はファリンさんの後を付いて行つた。

途中、何も無い所でファリンさんが何度も転けそうになつたので、その度に俺が体を張つて助けた。

ファリンさんはなのはとと同じ分類だろう、ドジと言ひ部類に……

紫雲のお嬢様の家へ（後書き）

次回はほのぼのした話（を予定しています）

次回もお楽しみに

TUKIMURA SUNUKA (前書き)

久しぶりに書いたから前の勘が中々取り戻せないです……

出来るだけ更新したいですが、バイトが在れば更新出来ないので其
処の所はご一承下さい。

誤字・脱字が在れば教えて下さい。

side 劉

俺はファリンさんに案内されて、アイツが居るこの屋敷の大きな庭にやつて來た。

庭に出ても、相変わらず猫は沢山其処等中に居るがな……そして少し歩いていたら、椅子に座つて猫を撫でて居るアイツの姿が見えた。

「其れじゃあ私は此処迄です！何か在つたら呼んで下さいねー。」

「あつ、ありがとうございました、ファリンさん。」

するとファリンさんは俺に頭を下げてそつ言つてきただので、俺も頭を下げる。ファリンさんにお礼を言つた。

ファリンさんは俺に笑顔で「どういたしまして！」と言つて、走つて屋敷に向かつた。

途中、何も無い場所で倒れて地面とキスしてたが……

「ここにちは、劉君。」

すると後ろで椅子に座つて猫を撫でて居るこの屋敷のお嬢様が、俺に挨拶をしてきた。

「ここにちは、そして今日はありがとうございました、すずか。」

俺は後ろを振り返つて椅子に座つて居る奴・月村とお礼を言つて、目の前に空いて居る椅子に座つた。

俺が椅子に座つてすずかの顔を見ると、すずかはクスクスと笑つ

ていた。

「別に良いよ、助けてくれたお礼も兼ねて家に呼んだんだからね。」

「そうか？でもお礼を言わせてくれよ、ありがとな。」

俺はすすかにそう言われたが、それでも俺はすすかに頭を下げてお礼を言った。

するとすすかは苦笑いをして「どうございましたして。」と言つてくれたので、俺は頭を上げて笑つた。

「しかしすすか、ノエルさんから聞いたんだが男が苦手らしいな？」

「えつ……うん、ちょっと苦手かな。」

「じゃあ何で俺は男なのに普通に話せるんだ？俺も男なんだが……」

俺はノエルさんから聞いた話をすすかに確認を取ると、すすかは苦笑いをしながら答えてくれたので俺は少し真剣な顔をして聞いた。俺はすすかが苦手な男なのに、すすかは全く無理をせず本当に何処にでも居そうな女の子だ。

そんな子が、男が苦手って言われても説得力に欠けるから俺は聞いたんだ。

「何でかな？……劉君は普通の男の子と違つて気軽に話せるんだよね。」

「其れは俺がお前を助けたからか？」

「違うよ……只、劉君には普通に話せるんだよね。」

すずかは苦笑いしながら俺の質問に素直に答えてくれた。

「何で俺は他の奴と違つて普通に話せるんだ？」

俺は今流行りの男の娘じやない、顔は完全に男顔。

其れにこれと言つてすずかに何かをした訳でも無い。

謎だね、世の中は不思議な事が一杯だね。

「……ねえ、劉君？」

「ん？……どうしたんだ、すずか？」

俺が一人で頭に在る疑問を適当に考えていると、真剣な顔をしたすずかが話し掛けてきた。

俺はすずかの顔を見て、ちゃんと椅子に座り直して真剣な顔をしてすずかを見た。

「……劉君って普通じゃないよね？」

「……何を言いたいのか全然分からんんだが……」

すずかの言葉に、俺は頭にマークを浮かべて素直な感想をすづかに言った。

「ごめんね。……でも劉君は、他の人と違うつて怖くないの？変な目で見られたりとか、イジメられたりしないかとか……」

すずかはそう言つて、顔を下に向けて黙り込んだ。

すずかは他の奴と違う所が在るみたいだな、そして他の奴に其の違う所を知られるのを恐れてるんだな。

「確かに怖い。」「

「……えつ？」

俺は素直な答えをすすかに言つと、すすかは俺の答えに驚いて顔を上げた。

すすかの目には、涙が溜まっていた。

「俺は普通の奴と違つて力が在る。俺にとつて一番怖いのはイジメられる事や怖がられる事・死ぬ事じゃない。……今迄友達だと思つていた人に拒絶される事だ。」

「…………」

俺は真剣な顔をして嘘・偽りの無い本当の気持ちをすすかに言つてゐるので、すすかは俺の話を黙つて聞いてくれている。

「今は俺の力を知つてる奴は、すすかを含めて数人の人達だけだ。だけど俺は、何時か自分の力の事を皆に言いつもりだ。」

「…………どうして？」

「俺は100%の絆で繋がりたいからだ。なのにこの力を秘密にしておいたら、100%の絆を結べないだろ？俺は相手を100%信じたいし、100%信じられたいからな。」

俺はそう言つた後、すすかに笑いながら「格好付け過ぎたな」と言つて椅子に凭れて背伸びをした。

「…………私にも、そんな絆を結べるかな？」

するとすずかは、真剣な顔をして俺の顔を見ながら俺に聞いてきた。

俺はちゃんと座つて、すずかに頬笑んだ。

「嗚呼、何時かきっと堅い絆を結べるさ。もし世界中がすずかとの絆を拒否したとしても、俺は絶対にすずかとの絆を捨てたりなんかしないから。……安心してくれよ、すずか。」

「…………ありがとうね、劉君。」

俺は厨二病の様な言葉をすすがに言つと、すずかは凄く嬉しそうな顔で俺にお礼を言つてくれた。

俺はすずかの顔を見て、俺は安心してすずかの顔を見て……

「どういたしまして。」

笑いながらすずかにそう言つた。

TUKIMURA SUNUKA(後書き)

次回は小学校に入学する話（を予定しています）

次回もお楽しみに！

小学校の入学式（前書き）

入学式つて題名なのに、入学式の話じゃない……

バイトをマジで辞めたいッス。

……関係在りませんね、全く。

誤字・脱字・変な所が在れば教えて下さー。

小学校の入学式

side 劉

すずかの屋敷に遊びに行つた日から少し歳月が経つた。
あれから今日迄に在つた事や起こつた事を、出来るだけ短く簡単に説明するぜ。

先ず最初に、アテネが俺とはやての保護者代理になつた。
俺はアフロディイの力で戸籍はちゃんとこの世界に在るのだが、保護者が居ないと色々大変だからな。

まあ名前は特に変わつていないが、俺とはやての保護者代理になつたんだ。

一一つ目、アリサとすずかがなのはとはやてと友達になつた。
まあ俺が裏で色々と頑張つたのだが、四人は仲の良い友達になつた。

三つ目、士郎さんに時々修行してもらつている。
士郎さんは元ボディーガードで、最強の剣士だから学べる物が沢山在る。

だから師匠弟子関係になつて、士郎さんに剣術を教えて貰つている。

る。

まあ偶に、なのはのお兄さんの京也さんや美由紀さんと試合をしてるがな……

五つ目、アテネが仕事をし始めた。

何処で働いているのかは教えて貰つていない、地球っぽいの本棚で検索しても出てこない。

だけど、何処かで働いて家にお金を入れている。

只、給料がハンパない金額だつたので最初見た時は一瞬気絶した。

六つ目、今日から俺達は小学生だ。

俺達が通う学校は、私立聖祥大附属小学校と言われる学校だ。

この学校には入試が在つたのだが、俺達は其の入試に合格したの

で通えるんだ。

俺の学費はアテネが払ってくれると言つてくれたので、ソッチの方の問題は無い。

まあこれ位かな、説明しなきゃいけない事は。

それでだ、さつき説明した通り今日から俺達は学校なんだ。だから俺は、学校の制服を着ているんだが……

「あつはははははは……に、似合つてこるぞ、じゅ、劉……あつははははははは……！」

ソファーに座つて俺の制服姿を見て爆笑している遊星が、涙目になつて爆笑しながら俺にそう言つてきた。

遊星が此処に居る理由は、俺達の入学式を見に来たからだ。

遊星の事は既にはやてに言つているから問題が無いんだが、此処迄爆笑されたら幾ら俺でも我慢出来ない。

「遊星、本気でぶつ飛ばしてやるよ！表に出ろや、『アラーマー』

「アア？お前がお坊ちやん制服を着てるから悪いんだひつが……まあ戦つてやるよ。ドッヂが強いのか白黒ハツキリさせよつじやねえか！」

俺が遊星を睨みながら遊星にそつぱんついたと、遊星も俺を睨みながら俺にそつぱんついた。

良いぜえ、ドッヂが上なのか分からせてやるよ！

俺達が外に出ようとした瞬間、ハリセンで頭を思いつきり叩かれた。

俺と遊星は余りの痛さに、頭を押さえて痛みを抑えようとした。

俺達が後ろを見たら、ハリセンを持っているはやてが居た。

……ハリセンは何処から持ってきた、はやて？

「今から入学式なのに、何してんの一人とも？」

「聞いてくれよ、はやて。遊星が俺の制服姿を見て、爆笑して馬鹿にしてくるんだよ。」

俺がはやてに原因を教えると、はやてが俺の制服姿を凝視してきた。

……やっぱ、俺の制服姿って変なのか？

其れはショックだ、ショック過ぎる。

変な制服姿で六年間過ごさないといけないって分かると、更にショックが大きくなつて立ち直れなくなりそう……

「うへん、別に変じゃないと思つけどな。変どころか凄く似合つてるとと思うで、ウチは。」

するとはやて、笑顔で俺の制服姿を見ながら遊星にさう言った。

「聞いたか、遊星！？似合つてのはやてが言つてるぞーーお前の美的感覚が可笑しいから、俺の姿を見て笑つてるんだよー。」

俺ははやての言葉を聞いて、はやての隣に移動して勝ち誇った顔をして遊星にさう言った。

俺が遊星にさう言つたら、遊星は呆れた顔をして俺とはやてを見てきた。

意外に失礼な奴なんだな、お前つて……

「……将来が面倒臭い事になるな。」

すると遊星は、明後日の方角に顔を向けながら俺を見てそう言つてきた。

……独り言ばっかり言つてると、将来絶対に認知症になるぞ。

「皆一、そろそろ学校に行くわよー！」

すると着物を着たアテネが、玄関から俺達にそう言つてきた。

「……まあ行くとするか。」

「……嗚呼。」

「そうやね。」

俺達は必要な荷物だけを持つて、玄関に行つて靴を履いて聖祥大附属小学校行きのバスに乗つて小学校に行つた。

さて、原作が始まる迄後三年……其れ迄は楽しい小学校ライフを楽しむとしますか。

俺はバスの窓から大空を見ながら、心の中で小学校を楽しむ事を決心した。

小学校の入学式（後書き）

次回から無印の話（を予定しています）

次回もお楽しみに！

始まつたストーリー（前書き）

今回から無印です。

誤字・脱字・変な所が在れば教えて下さい。

始まつたストーリー

s i d e 劉

聖祥大附属小学校に入学して何事も無く三年と言つ歲月が経つた。入学式から今日迄、特に大きな事件に巻き込まれたりする事は無かつたので、今は取り敢えず平和に過ごしています。

「劉君、速く食べなバスに乗り遅れるで。」

俺の前に座つて朝ご飯を食べているはやでが、時計と俺を交互に見てそう言つてきた。

はやは車椅子で学校に毎日通う事が無理なので、アテネが休みな金曜日だけ学校に通つている。だがアテネは今日は仕事で朝早くから会社に行つてるので、はやは今日は学校を休むのだ。

「嗚呼、急いで食べるよ。」

俺ははやでにそう言つて、言つた通り急いで朝ご飯を食べ始めた。こんな時でもちゃんとご飯は噛んで食べるぞ、噛んで食べた方が体に良いからな。

俺はそんな事を思いながら食べていると、何時の間にか完食していた。

俺は手を合わせて「御馳走様」と言つて、食器を持って台所に行つて流し台に食器を置いた。

「洗い物はウチがやつとくから、劉君は今直ぐにバス停に向かい。じゃないと、冗談抜きで遅刻するで。」

「マジかよ……それじゃあ行つてくるー。」

俺は時計を見て時間が余り無い事を確認して、準備しておいた荷物を持って玄関に向かって、靴を履いてリビングに居るはやてにそう言つて扉を開けた。

はやては俺にリビングから「行つてらっしゃーい！」って言つてくれたので、俺は少し元気になつてバス停に向かつて走り出した。

「よつ、猫。」

「いやーーー」

俺は家の前の堀の上に居た猫・管理局の……グレアムだったかな？
グレアムの双子の使い魔の……ドッヂか分からん。
まあ取り敢えず、グレアムの使い魔に挨拶をした。
はやての家に住み始めて大分経つから、コイツ等は俺の事を殆ど警戒しなくなつた。

まあ魔力0だし、仕方が無いつて言つたら仕方が無いんだけどね

つて、こんな事を話してる場合じじゃねえ！

俺は全速力でバス停に向かつた。

「つ、疲れた……」

俺はバスの椅子の背もたれに凭れて、荒れた呼吸を整える為に深呼吸をし始めた。

「劉にしてはギリギリだったわね。」

「寝坊でもしたの、劉君?」「

すると俺の隣に座っているアリサとアリサの隣に座っているすずかが、俺の顔を不思議そうな顔をしながら聞いてきた。

「朝ご飯をゆっくり食べてたからギリギリだった……」

俺は一人にギリギリだった理由を言つと、アリサは呆れた顔・すずかは苦笑いして俺を見てきた。

「どれだけ朝ご飯を食べるのに時間が掛かってんのよ……」

アリサは溜め息を吐いて俺を呆れた顔で見ながら言つてきた。
別に何時もは時間は掛からないんだが、昨日はアテネとはやてと一緒にドラクエ?の協力プレイをして……

「違った、昨日ドラクエ?をして夜更かししたからだ。」「

俺がギリギリだった本当の理由が分かつてそつまつと、アリサは更に呆れた顔をして溜め息を吐いてきた。
む、其の顔はドラクエを馬鹿にしてるな。

ドラクエ?、通称ドラゴンクエスト?は凄く面白いんだぞ。
協力プレイが出来ると言つドラクエ革命が起こった最高のゲーム

だぞ。

「劉君、今度一緒に協力プレイしない？」

俺がドラクエを心の中で熱く語っていたら、すずかがドラクエ？の協力プレイを誘ってきた。

俺は無言ですすかと握手をして、何度もすずかに頷いた。
すずかは読書が趣味だが、ドラクエ？の協力プレイは読書と同じ位好きだからな。

だが、なのはとアリサはドラクエ？を残念な事に持つてないんだ。
……買って貰えれば良いのに。

俺がそう思っていると、バスがバス停に止まつた。
そしてバスになのはが乗つてきた。

なのはは俺達に気付くと、^{丘駅}満点の笑顔で俺達の所にやつて来て俺の隣に座つた。

「お早う、なのは。」

「お早う、なのはちゃん。」

「お早うさん、なのは。」

「うん。お早う、アリサちゃん、すずかちゃん、劉君。」

俺達はなのはの顔を見ながら朝の挨拶をすると、なのはは俺達の顔をちゃんと見ながら朝の挨拶をしてくれた。

挨拶をする事はとても大切な事だから、皆もしっかりと挨拶をしようつな。

……俺は一体誰に言つてるんだ？
……この歳で惚け始めたのか？

其れは流石に不味いだろ。……

小三で惚け始めるつて前代未聞だぞ。……

帰つたらはやてに相談するか？

否、変に心配をさせちまうから無理だな。

アテネに相談するか？

否、何か恐ろしい事をされそつた気がする。……

「劉、帰つてきたら高町流〇・ＨＡ・ＺＡ・ＳＨＩです。」

死亡フラグが立つた様な気がしたが、気の所為……だと信じたい。
じゃあ遊星に相談するか？

……絶対に却下、全力で拒否する。

遊星の事だ、俺の事を絶対に馬鹿にするな。

此處は師匠である士郎さんに相談するのが一番だな。

「うだ、うじよい。

「劉哲がブツブツと独り言を言つてゐる……」

「今更気にしちゃダメよ、なのは。劉はいつなつたら放つておくれのが一番だから。」

「あ、あはははは……」

俺達は楽しい?朝の会話をしながら聖祥大附属小学校に向かった。決めた、今日は翠屋に行つて士郎さんに相談しよう。

始まつたストーリー（後書き）

次回は魔法少女が誕生する話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

将来の自分について（前書き）

予告していた話を変更しました、本当にすいません。

誤字・脱字が在れば教えて下さい。

将来の自分について

side 劉

朝のバスでの楽しい？会話から少し時間が経ち、聖祥大附属小学校は今昼休みの真っ最中だ。

俺は何時もの様になのは達に昼食を誘われたので、はやてが作ってくれた昼食を持つてなのは達と一緒に屋上に来ている。

屋上で昼食を食べるつて事は俺達の中ではもう決まっている。

俺ははやてが作ってくれた昼食を食べていると、突然なのはが俺・アリサ・すずかに「将来皆はどんな職業に就きたい？」って聞いてきた。

なのは、お前は社会の授業での先生の問い合わせ未だ考えてたのか……

今日の社会科の授業で働く親についての話が在つて、「将来自分はどんな職業に就きたいですか？」って先生が俺達に聞いてきたんだ。

其の質問をなのはは未だに考えていたらしく。

「アリサちゃんにすずかちゃん、劉君はもう結構決まってるんじよ？」

「でも全然漠然とよ。パパとママのお仕事を一杯勉強して私もやれたら居になつて……其れ位だし。」

「私もだよ。ぼんやりとだけど『出来たら良いな』って思つてるだけ。機械系とか工学系とか好きだから、そう言つ系のお仕事がしたいな……つて。」

「俺は特にしたいつて事は未だ見つかっていないな。だけど、後悔しない様に生きて助ける人を助けたいつて気持ちは在るな。」

なのはの問いに、アリサ・すずか・俺の順番でなのはに答えた。アリサとすずかの子供らしくない発言は今は置いといて、俺はこの頃のなのはと同じで将来何がしたいか決まつていない。

原作知識を使って原作ブレイクをするつもりだが、原作ブレイクをしなかつたら何をしたい？って聞かれたら答えられない。でも、転生した時から決めていた決意を嘘・偽り無く俺はなのはに言った。

「そつかあ、三人とも凄いねえ。」

なのはは俺達を本当に凄いと思つた顔をしながら見てそつ言つてきた。

「でも……なのはは喫茶『翠屋』の二代目なんかじゃないの？」

「そうそう、将来の旦那と翠屋を継ぐんだろう？」

アリサと俺は昼食を食べながらなのはにそつ言つて、なのはは俺達の言葉を聞いて俯いた。

「うーん……其れも将来のビジョンの一つでは在るんだけど……やりたい事は、他に何か在る様な気はするんだけど、未だ其れが何なのかハツキリしないんだ。……劉君、私は未だ結婚なんて考えてないよ！」

なのはは俯きながら自嘲氣味にそつ笑いて、最後に俺を見ながらツッコんできた。

ツッコむタイミングは遅かった、ツッコむ内容は小学二年にしては良かつたぞ。

俺はなのはにGとして卵焼きを食べた。

あつ、この卵焼きの味付けが俺好みの味付けだ。
帰つたらはやてにお礼を言おひ。

「私、特技も取り柄も特に無いし……」

俺がはやてに帰つたらお礼を言おひと心の中で決めていたら、な
のははシリアル空氣を出しながらふきこ声でそう呟いた。
……つてなのはー

「自分を否定するとかフザケるなよー。」

俺は大声を出してなのはを叱つたので、なのはを怒りつけとしたア
リサや叱られてこるなのはは驚いた顔をして俺の顔を見てきた。

「自分を否定したら何もかもが出来なくなるー！俺達は未だ子供だ、
将来沢山の可能性を秘めた子供だーなのにそんな可能性を捨てて、
自分を否定したらダメだろー！」

「わうだよ、なのはちゃんにしか出来ない事はきっとあるよー。」

俺は少し怒った顔をしながらなのはに思つた事を言つと、すずか
は俺の言葉に続けてなのはにそう言った。

するとなのはの後ろに回り込んだアリサが、なのはの口を突然目
一杯広げた。

「大体アンタ、理数の成績はこの私より良いじゃないのー！其れで取
り柄が無いとか、どの口が言つてるのかしらねえー！」

「ら、らつて私……！ふん系苦手らひー運動らつてれきりこひー！」

アリサがなのはの口を田一杯広げながら説教をすると、なのはは涙目になつてアリサ、否、俺達にそう言つてきた。

……何を言つてゐのかは全然分からぬが、何を言いたいのかは何となく分かる。

「だつたら俺達を頼れば良いだろ？人間、この世に完璧な奴なんて存在しないんだ。人間は何かしらの苦手分野が在る、森羅万象にな。だけど、其の苦手分野を助ける仲間だつて居るんだ。なのはが文系が苦手なら教えてやるし、運動が出来ないなら手取り足取り基礎から教えてやる。だからもう一度と自分を否定しない、約束してくれなのは。」

俺はなのはにそう言つと、アリサはなのはの口を広げるのを止めて俺の隣にやつて来て、すずかと一緒に俺の言葉につなづいた。

そして俺はなのはに小指を出すと、なのははゆっくり俺の小指に自分の小指を絡めた。

するとアリサとすずかも小指を俺となのはの小指に器用に絡めた。

「……私、迷惑を掛けるかもしれないよ？其れでも良いの？」

「迷惑上等！」

「当たり前よ！」

「勿論だよ！」

なのはが少し怯えた顔で俺達に聞いてきたので、俺達は真剣な顔をしてなのはにそう言つた。

するとなのはは嬉しそうな顔をして小指に力を入れた。

「　「　「　「　おーびきつげんまん、うそつこたらまじせんばんの一ます、
ゆびさつたー！」　「　」

俺達は歌を歌つて約束し、指を離した。

そして匂食を再び食べ始めた。

なのははやつときと違つて心の底から楽しんでいる顔をしていた。

将来の自分について（後書き）

次回こそ魔法少女になる話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

誕生する魔法少女（前書き）

バイトを遂に辞めたアアア！！

うん、気分はマジで最高だね！！

英語は基本使いますが、間違つて書いているかもしねないので、もしミスつたら教えて下さーい。

誤字・脱字・変な所が在つたら教えて下さーい。

誕生する魔法少女

s i d e 劉

「はやて、風呂掃除は終わつたぞ。」

「じゃあ次は晩ご飯を作るの手伝つてくれへん?」

「了解ッス!」

俺は風呂掃除を終えてキッチンに居るはやてに其の事を伝えると、はやてが食材を冷蔵庫から出しながらそつと言つてきたので俺は了承してエプロンを付けてキッチンに入った。

あれから時間は大分経つて、時刻は午後六時三十分。

学校から帰る際、なのは達に「一緒に帰ろう。」と誘われたが士郎さんに聞かなくてはいけない事が在つたので其の誘いを断つて、一人で翠屋へ行つて士郎さんに相談した。

士郎さんは素晴らしいアドバイスをしてくれて、其のアドバイスが納得出来る物だつたから俺はシュークリームを買って家に帰つてきた訳だ。

俺は士郎さんに「最近、惚け始めたんですけどどうしたら良いですか?」と質問したら、「全てを受け入れたら心が軽くなるよ。」と答えてくれたんだ。

……あれ?

考えてみたら質問の答えになつてないよな、士郎さんの言葉つて

クツ、すっかり騙されちまつたぜ!

流石は最強の剣士だな……関係無いか。

……

「どうしたんや劉君、さつきから小さこ声で独り言を言つて……」

「ん? 何でも無いから気にしないでくれ。」

はやてが心配そうな顔をしながら俺に聞いてきたので、俺は笑顔ではやてにそう言って鼻歌を歌いながら食材を切り始めた。はやは俺のそんな行動を見て笑つて、俺と一緒に食材を切り始めた。

うんうん、誰かと一緒に料理を作るって気分が良いな。

今日はカレーだな、頑張つて美味しいカレーを作つてアテネを驚かせたるで!

……何故急に関西弁になつたんだ?

「…………未だか?」

俺はリビングでソファーに座り、目を瞑りながら“ある事”を待つていた。

其の“ある事”とは、ジュエルシードの暴走する事だ。

今日から原作が始まる、つまりなのはが魔法少女（決して魔砲少女ではない）になる。

俺はなのはが魔法少女になる時から介入し、絶対に全員が笑顔でいられる様に無印を完結させてやる。

しかし、何時になつたら暴走するんだ？

コッチは外で見張つているグレアムの使い魔に怪しまれない様に、ランニング用のパークードジャージを着てるって言つのこと……はやてとアテネには既にこの事を話しているので、堂々と家を出れるけど暴走してくれないとな。

…………… そう言えば、

「ユーノの念話が聞こえるのって魔力が在る奴だけだつたっけ？」

俺はふと原作の事を思い出して小さい声でそう呟くと、頭が急にフル回転して顔が青ざめていくのが分かつた。

魔力が無い俺＝ユーノの念話が聞こえない + 原作開始が分からない。

「完ツ全にミスつた！！」

俺は近所迷惑になる事も忘れて大きな声でそう叫び、急いで玄関に向かつてランニングシューズを履いて原作の林に向かつた。

グレアムの使い魔は俺の格好を見て特に気にする様子を示さなかつたので、この作戦は上手く行つたが作戦の中心が失敗したよ！！
クソッ！！

……………

俺は瞬歩を何度も使って直ぐに原作の林にやつて来た。

此処に来る途中、建物や道路・木などが破壊されていたのを見て、俺は“口寄せの術・天鎖斬月”を使って天鎖斬月を口寄せして、“影分身の術”を使って破壊された物の応急修理をした。

俺は天鎖斬月を持つて林の中を走り回っていると、急に拓けた場所に出た。

すると其処には、フェレット姿のユーノと会話するのに夢中になつているなのはど、其のなのはどフェレット姿のユーノを殺そうとしているジュエルシードの暴走体が居た。

俺は瞬歩を使ってなのは達の前に移動して、ジュエルシードの暴走体の攻撃を天鎖斬月で受け止めた。

ガツキイイイン！！

グツ、ち、力が思つてたより強い……

「えつ、りゅ、劉君？」

なのはが驚いて途切れ途切れになりながら、後ろで俺に話し掛けてきた。

なのはに話そうと思った時、更に力が加わって力負けしそうになつた。

「せ、説明は後だ！コイツは力が強いから長くは保たない、其の間に魔法少女になれ！！月牙天衝ッ！！」

俺は声を荒げてなのはにそう言つて、ジュエルシードの暴走体を思いつきり蹴り飛ばして直ぐに天鎖斬月の必殺技の“月牙天衝”を

放つた。

俺に蹴り飛ばされた+“月牙天衝”を喰らったジュエルシードの暴走体は、多少の傷は出来ていたが余りダメージは受けていなかつた。

チツ、幾ら何でも強過ぎじゃねエか？

これも世界の意志の力か？

其れとも俺と遊星が生み出したイレギュラーの所為か？

俺は其の事を考え込みながらジュエルシードの暴走体に近付き、天鎖斬月を肉眼では捉えきれない速さで振つてジュエルシードの暴走体にダメージを与えていった。

だが、俺が斬つて付けた傷も直ぐに消えてなくなつて、ジュエルシードの暴走体はカウンターをしようとしてくる。

クツ、何年も修行したのに全然歯が立たねエじやねエかよ……だけどよ……

「俺に出来る事は精一杯やるんだアアー！」

俺はそう言って“月牙天衝”を放つ為にジュエルシードの暴走体から距離を取つて、“月牙天衝”を放とうとした時……

「「レイジングハート、セットアップ！」「

〔Stand By Ready -Setup〕

後ろからのはとコーノの声、そしてレイジングハートの声が聞こえてきた。

すると次の瞬間、桜色の光が俺の後ろで光り出した。

さて、魔法少女が誕生したんだ、精一杯アシストさせて貰うぜ。

俺は天鎖斬月を両手で持つて、ジュエルシードの暴走体に構えながらそう思った。

誕生する魔法少女（後書き）

次回はなのは side の話、そしてジュエルシードを封印する話（）
を予定しています。）

次回もお楽しみにーー！

リリカルマジカル（前書き）

金曜はすいませんでした。

テスト一週間前だったので更新が出来ませんでした。

今週の木曜からテストなので更新が出来ない可能性が在るのですが
承下さい。

誤字・脱字・変な所が在れば教えて下さい。

リリカルマジカル

s i d e なのは

私は突然、誰かに助けを求められたので急いで声が聞こえた場所に向かつたの。

そして声が聞こえた場所に着くと、其処は今日林の中で倒れていったフェレットさんを預けた動物病院の近くだったの。でも動物病院はボロボロになつていて、道路や建物にも亀裂が入っていたの。

私は怖くなつて逃げようとした時、フェレットさんが今迄見た事も無い生き物に追い掛けられていたのを見て、私は逃げるのを止めてフェレットさんを助けに行きたの。

フェレットさんの所に行こうとした時、見た事も無い生き物の体当たりをギリギリ躊躇してコツチに来たの。そしてフェレットさんは、私の顔を見て嬉しそうな顔をしたの。

「僕の声を聞いて来てくれたんだ。」

：

・ · · · ·

・ · · · ·

えつ？

「フェレットさんが喋つた！？」

私は目の前に居るフェレットさんが喋つた事に、大きな声を出して驚いたの。

だ、だって驚くでしょ！？

あ、あの動物のフェレットさんがしゃ、喋つたんだよ！？

もう頭が付いて行かないよー！！

すると見た事の無い生き物が私達に突つ込んできたので、私は考えるのを止めてフェレットさんと一緒に走り出したの。

「君には素質が在る！」

私とフェレットさんが木の陰に隠れたら突然、フェレットさんが私の顔を見てそう言つてきたの。

そ、素質つて私に何の素質が在るの！？

「君には魔法を使う素質が在るんだ！」

「魔法！？」

するとフェレットさんが私の顔を見ながら魔法を使つ素質が在つて言つてきたの。

ま、魔法つて漫画とかに出てくるあの魔法？

私が考えていると、見た事の無い生き物が上から降つてきたけど、私とフェレットさんはギリギリ避けれた。

「僕は君とは違う世界から来ていて、捜し物が在るんだ！だけど、僕の力は弱いから君みたいな素質が在る人に手伝つて欲しいんだ！自分勝手なお願いですけど、お礼は絶対にしますから！」

「そんな事より、どうすれば良いの！？」

フューレットさんが私に頼んできたけど、お礼とかそんな事を言つてゐる場合ぢゃないと思つの！

ガツキイイイイイー！

すると突然、私の前から大きな音が聞こえてきたの。

私は急いで横を見ると、長くて黒い刀で私達を守つてくれている

劉君が居た。

……えつ、

「えつ、りゅ、劉君？」

「せ、説明は後だ！コイツは力が強いから長くは保たない、其の間に魔法少女になれ！！月牙天衝ツ！！」

私が劉君に話し掛けると、劉君が私とフューレットさんにそういつて刀を横に降つて、刀から黒い風とキックを見た事の無い生き物に放つたの。

そして劉君は飛ばした見た事の無い生き物に直ぐに行つて、刀を凄く速い速さで斬つていたの。

「さあ、急いで魔法を！彼を助けないと！」

「うんー！」

「田を綴じて心を澄まして。」

「フレットさんは自分の首に掛かっている宝石を私に渡してそう行つてきたので、私はフレットさん言われた通りにすると宝石が温かくなり始めました。

まるで宝石が生きているかの様な鼓動を、ほんの少しだけど感じました。

「管理権限、新規使用者設定機能フルオープン。」

すると宝石の鼓動が次第に大きくなり始めました。

「僕の言つた言葉を繰り返し言つてね。いくよ?」

「うん……！」

速くしないと劉君が……絶対に劉君を助けてみせる！

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

「契約のもど、其の力を解き放て」

「えと……、契約のもど、其の力を解き放て」

「風は空に、星は天に、」

「風は空に、星は天に、」

「不屈の心はこの胸に、」

「不屈の心は！」の胸に、

「！」の手に魔法を！

「！」の手に魔法を！』

「『レイジングハート。セットアップ！』

〔Stand By Ready -Setup〕

私がフュレットさんの言葉を繰り返して言つと、桜色の光の柱が現れた。

えつ、一体どうしたの！？

「何で魔力だ……。落ち着いてイメージして！君の魔法を制御する、魔法の杖の姿を！そして、君の身を守る、強い衣服の姿を！」

「そ、そんな、急に言われても……」

フュレットさんが私にそう言つてきたので、私は小学校の制服と宝石に合いそうな魔法の杖をイメージした。

すると私がイメージした服装に変わつて、私がイメージした魔法の杖を持っていた。

「成功だ！」

「ふえ、ふえええ！？」

「ふえ、ふえええ！？」

後ろからなのはの驚いた声が聞こえてきたので、俺は“月牙天衝”をジユエルシード暴走体に放つてなのはの隣に移動した。

「なのは、あれば俺の力じゃ倒せねエ。だからなのはの力で封印してくれ。」

「で、でも劉君、封印の仕方つて私知らないよ……」

「……其処のフュレット擬き、俺がもう一度時間を稼ぐから、其の間になのはに封印の仕方を教えろ！」

「は、はい！－！」

俺はユーノにそう言って、天差斬月を構えてジユエルシード暴走体に天鎖斬月の“超速戦闘能力”を使ってジユエルシード暴走体に連続で斬撃を放った。

“月牙天衝”より与えるダメージは少ないが、時間稼ぎをするにはこの戦い方で十分だ。

俺はジユエルシード暴走体の攻撃を紙一重で避けながら攻撃をしていくと、なのはの方から大きな力を肌で感じた。

俺は後ろを見るとなのはがレイジングハートをコッチに構えていた。

「劉君－！」

「…? わ、分かつた!」

俺はなのはに名前を呼ばれたので“瞬歩”でなのはの隣に一瞬で移動し、なのはは俺が隣に来た事を確認するとジュエルシード暴走体を睨み付けた。

「封印すべきは、亞まわしき器…ジュエルシード…」

「ジュエルシード、封印!」

〔Sealing Mode . Set up . Stand by
Ready〕

「リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアス21、封印!」

〔Seal-ing〕

ユーノとなのはとレイジングハートがそんな会話をしたら、レイジングハートから光のリボンの様な物が出てきて暴走体に巻き付く貫いた。

そして暴走体は消え、消えた中央にジュエルシードが落ちていた。

「其れをレイジングハートで触れて。」

ユーノに促され俺となのははジュエルシードに近付き、なのははレイジングハートでジュエルシードに触れた。
そしてジュエルシードはレイジングハートにより封印された。

「……封印出来たの?」

「はい、出来ました。」

なのはがユーノに確認を取ると、ユーノは安心した顔をして頷いた。

俺はユーノの言葉を聞いて天鎖斬月を消して辺りを見渡すと、酷く破壊された道路や木などが在った。

そして耳を澄ませば、遠くからパトカーのサイレンが聞こえてきた。

……ヤバいって！

「しつかり捕まつてろよー！」

「ふえ？」

「えつー!?」

俺はなのはとユーノにそう言って二人を抱えて、全速力でその場から立ち去った（逃げ出した）。

「うー、ごめんなさいーーー！」

なのはが俺に抱えられながら大声で謝っていたが……

リリカルマジカル（後書き）

次回は自己紹介 + の話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0974u/>

魔法少女リリカルなのは 常識を変える者・創造する者

2011年11月27日17時46分発行